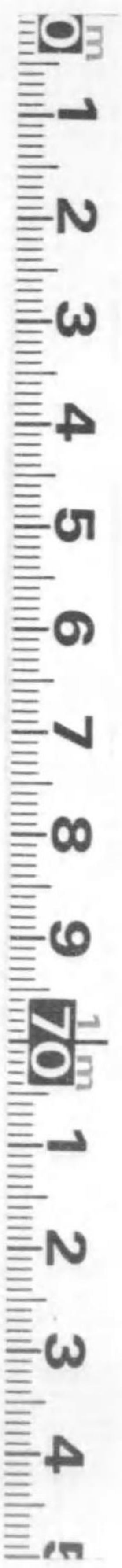


325
378_{ca}



始



325-378次

和漢古今

禪門佳話

菅原洞禪編

大正
6. 1. 27
内交

序

天關を掀げ地軸を翻し、虎兇を擒へ龍蛇を辨ずるは素是れ、衲僧家の本分。教外別傳、不立文字の端的は、箇の活潑々の漢にして始めて句々相投じ、機々相應ずることを得べし。當機直截、逆順縦横の作略あるに非ずんば争てか禪巔道頂に立つて、古聖を權衡し宗乘に龜鑑たらんや。吾人、任を佛祖の慧命相續に負ふ者、退いて自己の道業を顧念し、進んで教界の現状を看取するに、無量の感慨轉た禁ずる能はず。茲を以て菲才自ら揣らず、昨春「禪林奇行」を公刊して、此界に於ける先徳の行履を披述す、

圖らず世に多大なる驩迎を受けたるは、誠に予の本懐とする所、而して本書は前者の未だ盡さざるを補ひ、更に大解脱門の用諦を闡明するに努めたり。蓋し一は鑑みて自己策勵の鞭撻に充て、上四恩を報じ、一は流布して以て下化衆生の本願を全うせんと希ふのみ。儻し誤つて他の鼻孔を摸索し回轉し去らば、韓獪の塊を逐ふと一般。垂手幾回すと雖も、網を透るの金鱗、豈に居して水に滞らんや。人々須らく頂門に眼を具し、自己の脚跟下を照顧せざるべからず。

大正五丙辰年臘月廿五日

菅原洞禪識

目次

前篇 一 拽石

至道無難禪師の前半生……………一
 關山と幸に愚堂の在る有り……………六
 日置黙仙禪師發心の動機……………八
 承陽大師の脱落身心……………一一
 水影を見て大悟せる洞山大師……………一三
 眞桑瓜に釣られし大燈國師……………一六
 清涼殿上の大法戰……………一八
 虎聖を陥倒せる大光國師……………二〇
 松に八十往生を誓つた南天棒……………二二

喫茶喫飯底の常濟大師……………二四

願行の模範たる復古翁円山……………二七

石川素童禪師參禪の経路……………三一

趙州一僧の爲めに大道を説く……………三六

五祖會下の第一人慮行者……………三八

白隠に參じて剃髮せる大橋太夫……………四一

星見天海和尚の行履……………四六

楠田病院長の九寸五分……………四九

尼の侮辱に發奮せる俱胝和尚……………五二

神機縦横の狼玄樓……………五五

澤庵和尚江戸入の真相……………五八

秋野孝道師の跣足參り……………六一

惟嚴禪師と李文公……………六四

神尾將軍の參禪振……………六五

妻女を離別せし今北洪川……………六九

心越禪師の膽力……………七三

三度勅使を固辭せる木禪庵……………七五

眞個の師家松蔭和尚……………七八

鳥尾得庵伊藤公を一喝す……………八〇

楠公決死の前日……………八二

志閑禪師と末山尼……………八四

新井石禪師得度の因縁……………八七

一塵一芥も皆是佛種……………九〇

居士渡邊無邊の熊の皮……………九三

中篇 一般士

自隱會下の俊才……………九七

東叡和尚陰徳の行持……………一〇〇

脚下の知れぬ捨得の詩偈……………一〇三

鬼文常と高津拍樹……………一〇五

面皮を焼きし女禪客……………一〇六

勝海舟の鍊膽術……………一一〇

惡辣の師家を選んだ祥山和尚……………一一二

辛辣無類の焼禾山……………一一五

慢心の折伏に發奮せる東坡居士……………一一八

發狂と誤られたる阿察女……………一二一

餅屋の説明をやつた小僧さん……………一二三

口頭三昧の釋宗演師……………一二五

風外和尚と猫……………一二九

不意に大悟せる張九成と夢想國師……………一三一

與奪自在は禪の本分……………一三三

臨濟打爺の拳……………一三六

乃木大將の參禪談……………一四〇

曠より掘出されたる通幻禪師……………一四三

夏冬が一所に來たか珍龍さん……………一四五

白隱禪師の地獄極樂……………一四八

穆山禪師の眞面目……………一五一

身心の鍛鍊より見たる伊藤公……………一五三

居士の胸中を看破せる默雷禪師……………一五九

一休禪師の女人濟度……………一六〇

峻嚴なりし淺野斧山和尚……………一六六

己庵毒藥を投ぜられて大悟す……………一六八

禪的性格の三博士……………一七〇

信長の師傅平手政秀……………一七五

道に親しき祖岳和尚……………一七九

白樂天を歸服せしめた道林和尚……………一八一

筆と舌の咄堂居士……………一八四

三昧を會得せる又十郎……………一八七

遠羅天釜と二木博士の腹式呼吸……………一九二

後篇 三昧境

文献院古道漱石居士……………一九七

智辯博識の聖一國師……………二〇〇

努力主義の兒玉玄海和尚……………二〇三

鐵舟居士の無刀流……………二〇八

元兵の膽を奪ひし佛光國師……………二〇九

河野盤洲參禪の動機……………二一二

夢裡に入宋せる夢想國師……………二一五

路傍の婆子に遣り込められし徳山……………二一七

反省會の米峰と禁酒會の米峰……………二二〇

一生菴主の正受老人……………二二三

東瀛和尚と頭山滿……………二二六

琢禪和尚の乞食連歌……………二二九

妙心開山關山國師……………二三一
 禪機潑瀾たる侯大隈重信……………二三五
 豪膽無類の由利滴水……………二三六
 一休に水を溶せし華叟和尚……………二三八
 默重禪師と稻荷の検査官……………二四一
 牛頭山の法融禪師……………二四三
 大入道狐わなに罹る……………二四五
 一日作さざれば一日食はず……………二四七
 黄檗鐵眼禪師の大藏經……………二四八
 古人の難行を範とせよ……………二五一
 丹田の修養に努められし鈴木充美……………二五二
 桃花一見豁然大悟……………二五四

西郷南洲の活作略……………二五五
 大火焰裡に示寂せる快川和尚……………二五七
 悟由禪師と虚空藏菩薩……………二五九

目次終

前篇
一
拽石

至道無難禪師の前半生

東京小石川茗荷谷町に木の香未だ新しき宏壯なる殿堂伽藍、「至道庵」の在ることは參禪の客の普ねく知るところであらう。目下至道會を組織して毎月釋宗演師を請し、提唱參禪が盛んに行はれて居る。

至道庵は其名の如く、中世禪界の偉傑至道無難禪師の道場である。予は茲に禪師の行履を述ぶるよりも、寧ろその出家の動機に就いて禪師が格外の機を窺はんと欲するものである。

句に「澁柿の澁味そのまゝ甘味かな」と、禪の本分底より見來れば、元來除くべき煩惱もなければ拂ふべき塵埃もない。堅固法身の佛と云ふも色身敗壞の凡夫と云ふも元是れ一念の轉處に依つて分るのである。この意味を尤も徹底的に説明する好資料は、無難禪師の前後劃然たる生涯である。

當時禪界を風靡せる妙心寺愚堂國師が江戸へ下らるゝ途中、一杖一笠中仙道を辿つて竹中驛迄來た。折しも日は將に西山に沒せんとす、夕闇に閃く電光と共に沛然たる大雨、穿ち來りし草鞋の紐も切れ果て、法衣の袖は搾るばかりに濡れた。フト傍を見ると數足の草鞋を軒に吊したる、いふせき百姓家がある、これ幸ひとその一足を求めて暫時の雨宿を乞へば、此家の女房出でて「見苦しき住居なれど、差支なくば上りて雨露を凌ぎ玉へ」との事に、國師は一夜の宿を求めて早速佛前に看經をした。其傍に端然と坐せる老母並に最前の女房子供等が何か心配氣に吐息をついて居る、様子あり氣な此場の仕儀、何事ぞと國師は改めて尋ねた。涙ながらに語る女房の繰言を聞けば、其家の亭主は大酒飲み、飲んだ上の道樂三昧、家運益々傾くのみか人様への迷惑後生の程も案じらるゝ程に、何とかして善心に立歸る方法もあらば教へ下さる様との事、國師は暫時黙然と考へ居たりしが、聽て何を思つたものか、女房に命令して上の清酒二升と二三の酒肴とを取寄せ、佛前に端坐して亭主の歸りを待つて居た。折

しも夜の静寂を破つて入口を叩くのは、例により博奕場から歸つた酒臭き此家の主人であつた。

見れば、一人の旅僧が佛前に坐禪をして居る、「コラ女房居らぬか」と怒鳴る聲を聞いた愚堂國師、クルリと向直つて「柄は御覽の通りな旅の僧、劇しい夕立に逢うて今宵一夜の宿を乞うた者ぢやが、聊か柄の志、これなる酒と肴、快く召上つて下さい」と差出したのは最前の徳利と肴であつた。「こは思ひ掛なき御馳走」と亭主は雀躍して喜んだ。早速大盃を傾けて浴びるが如く飲んだが、問もなく其處に酔倒れる。其儘にして置いて、禪師は又元の姿、端然として坐定三昧。夜は森々と更け渡り五更の天の將に曉けんとする頃、酔覺めの寒さに震へて起き上つた亭主。醉眼に見れば旅僧は例によつて坐禪をして居る、妙な坊主もあるものと「一體お前は何處から來た」と問うて見た、「柄は妙心寺の愚堂ぢやがこの度江戸へ上る途中……」と聞いた亭主は二度屹驚、飲んだ酒も醒め果て、三尺ばかり飛び下つた、佛法の佛の字も知らぬ男であ

つたが流石天下の愚堂禪師は其名丈を知つて居た。

此有様を見るより機至れりと看破した愚堂國師は、諄々として酒の害を説き、一家一族の心痛を述べ、人身の受難き事より無常の迅速なる法理に及び、安心決定の急務を説いた。流石放蕩無頼の主人も初めて夢の覺めたる心地して、翻然として前非を悔い今後の改心を誓つたのである。

此有様を襖の蔭に漏れ聞いたる老母並に女房の喜悅は如何ばかりであつたらう。間もなく東天紅と共に禪師は出立の用意、此洪大な御法の恩に酬ゆる一端にもと、覺めたる亭主は禪師の小やかなる荷物を負うて送つて呉れた。三里、五里、十里と距つても歸らうと云はぬ、其間に深くも決心したものと見えて、

「希くは禪師の弟子として一生涯隨侍さして下さい」との願、餘儀なく其願を容れて弟子にした、其弟子こそ實に日本の禪門に多大の貢献をした、學徳兼備の宗師家、至道無難禪師其人である。

無難禪師の法嗣には信州飯山の城主の庶子にして後日天下に名を得し正受老人あり、老人の法嗣が禪門の中興と崇めらるゝ白隱禪師である。

本篇の初めに述べた至道庵は、至道無難禪師の親戚に當る江戸の白木屋の建立せるもの、明治維新前後一旦廢寺の運命に相遇せるも、現白木屋主人が、特志を以て再建せられたのが現在の建築物である。足一度庵中に入るものは講席を兼ねたる坐禪堂の奥よりたる壇上に愚堂、無難、正受、白隱の四禪師の木像を拜するであらう。

あゝ無難禪師の前半生、世には斯る放蕩無頼の漢は數多く居る、而も一朝の發心に苦修辨道、終に世を利し人を濟ひ、其名を後代に傳へ得るもの果して幾人あるであらう。予は一日至道庵に釋宗演師を訪ねて、禪師の墓苔を拂ひ無限の感に打たれざるを得なかつた。

宿りして春の山邊にねたる夜は

夢の中にも花ぞ散りける

關山と幸に愚堂の在る有り

二十四流日本禪。惜哉大半失其傳。關山幸有愚堂在。續煇聯芳三百年。

京都妙心寺開祖關山國師滅後三百年、其大遠忌に當り、導師を勉められたのは、當時の同本山輪番住職愚堂國師である。妙心寺從來の慣例として、遠忌の偈頌は一週間以前大衆に披露して一般の次韻を求むることに成つてゐたから、愚堂國師も其例に慣ひ一週間前發表されたのが右の偈頌である。

當時は妙心の極盛時代で、天下の英衲名匠は雲の如く集まつて居た。各々此偈頌を見て如何にも能く出来ては居るが、併し第三句の「關山幸有愚堂在」は少々不穩當であると異口同音、されども誰あつて國師に直接詰るものがない。

愈々當日となつた。國師は八十の老體を提げて數百の大衆を率ゐ、上殿獻香、音吐朗々、一二句了つて第三句の有愚堂在を些の臆面もなく唱へられると、衆中豫て英

氣縱横其人ありと聞えし越前國泰寺の大愚和尚は、國師の言ひも果てぬ間に、乾坤を打破するが如き大音聲「此處にも居るぞ」と絶叫せられた。國師は直ちに「愚堂在り」を「見孫在り」と訂正して唱へ直し、續いて第四句を唱へ了つて大遠忌を無事圓成に勤められたと云ふ事である。國師の意氣と謙讓と、圓轉滑脱の妙に至つては千聖不傳底の美談である、而も大愚の一撈に至つては、恰も驪龍に跨つて角を拗折するの概があるではないか。

愚堂國師が若僧時代には、妙心寺山内澤聖院住職庸山和尚に師事して居られたが、其後各地の僧堂に掛錫して具さに辛酸を嘗め、再び聖澤院に歸り庸山和尚に參じて所解を呈した、然るに和尚は大喝一聲「そんな生ぬるい悟りが何になるか」と受付けない。國師發奮措く處を知らず、早速素裸になつて竹籤の中へと飛込み只管に坐禪三昧。夜は深々と更け渡り、初秋の冷氣肌に透る、折から群がる數百の蚊蚊は顔や手足の痒別なく、所嫌はず刺す苦しさ、見る／＼全身赤く腫れ上り、殆んど感覺を失ふに至つ

關山と幸に愚堂の在る有り

た。折しも響く曉天の鐘、東天微に曙光を認むるの時、豁然として省悟し、直ちに女室に上つて見地を披撫せしに、庸山和尚は嬉し涙と共に印可證明せられしと云ふ。

承陽大師は「坐禪は唯是安樂の法門なり」と示されたが、此安樂を得るためには斯うした苦修を経ねばならぬのだ。

日置黙仙禪師發心の動機

大正五年十一月三日、曹洞宗大本山永平寺に晋山式を舉行せる日置黙仙禪師は、過去數十年間隨波逐浪底の生活、或時は滿洲の原野に枯骨を蒐めて戦死者の英靈を弔ひ、或時は閻浮樹下に佛陀の聖跡を訪ひて薫香禮拜、阿里山上に登つては總督佐久間將軍に覺王殿の用材を寄附せしめ、日本佛教徒を代表しては暹羅國王の戴冠式に臨み、日獨戰に於ては掃海未だ畢らざる青島沖に戦艦を訪ひ、丕山の戦跡に同胞の靈魂を慰めては幾度か法衣の袖を鐵條網の爲めに裂いた。實に禪師の行履は東涌西没、逆順縱横

の概がある。その道力の勝れたると活動的なるとは教界獨歩の第一人と稱するも敢て過言ではない。

禪師は弘化四年正月廿三日鳥取縣東伯郡下北條村に生れた。生來殺生を好み、後の森に出でては小鳥を捕へ、前の小川に遊んては魚を釣るのを無上の樂として居た。然るに禪師の父は非常に殺生を嫌ひ、幾度か幼き師を膝下に呼び寄せては其不心得を叱責した、けれども剛放なる師は直ちに忘れて又釣竿を昇ぎ出し、其竿を折られたとも度々あつた。

所が禪師十一歳の時、弟の源之助が不圖した病が原因となり終に死去して了つた、子供心にも淋しさ堪へ難く、轉變無常の世相を觀じて來たのである。折しも鳥取市の景福寺に於て無學和尚を戒師とせる授戒會が盛んに行はれた。一日父に伴れられて初めて見たる莊嚴なる儀式と多くの僧侶の讀經とを耳にせる師は、非常に有難く感じて、出家求道の志を萌すに至つた。

歸來兩親に此旨を語り、出家を許されんとを請うたが、繼しき母は義理ある中、世間の手前もあり、殊に幼き弟の逝去後は一段家庭の淋しさに、何として師の願を容れられやうか。父は暫く思考の後、

「汝は日頃から殺生ばかり好で、父の訓も聞かぬ者が、何うして出家など出来るものか、惣中途で僧侶になり損ね、家に歸つて世間の笑を受けようより、始めから許さぬがましぢや。一體出家と云ふものは汝の如く氣まぐれ半分て爲れるものではない、お寺の小僧さんの様子を見るがよい、朝は暗いから起きてお勤めもせねばならぬ、お經も覚えねばならぬ、掃除もせねばならぬ、汝のやうに釣竿を擔いてばかり遊んで居る者は、たとひ出家になつたとて他人の前に恥を曝しに行くやうなものだ。」と理非を説いて諄々と聞かせる。さて斯う聞かせられては尤もではあるが、許さねば許さぬ程、尙更出家の念が起つて、終に寢食さへも忘れて父母に頼んだ。其健氣な決心を見て兩親は初めて許可したのである。時に禪師は年齒僅かに十二歳、播州氣高郡

北河原村中興寺の默中和尙を師として剃髮染衣の身の上とはなつた。

丹波の圓通寺より西有禪師の跡を繼いで可睡齋に喬遷し、今や曹洞宗の根本道場たる大本山永平寺不老閣に入れる禪師の胸中や如何であらう。

承陽大師の脱落身心

今日一萬四千の末派を有する我國に於ける曹洞宗の開祖承陽大師は、支那寧波府の天童山に如淨禪師を訪うて日々夜々の坐禪に這箇の一大事を究明して居られた。或日後夜の坐禪に隣單の一僧睡眠して居る有様をば如淨禪師見玉ひて、誠めて曰く、參禪は須らく身心脱落なるべし、只管に打睡して什麼をなすにか堪へんと、嚴格なる垂示をされたのである。承陽大師傍に在て豁然として大悟せられ、直ちに方丈の室に上り、如淨禪師に面して焼香をされた。

如淨禪師問ひ玉ふに、焼香の事作麼生、大師曰く身心脱落し來る、淨祖曰く身心脱

落、脱落身心、大師曰く這箇は是れ暫時の技倆なり和尚猥りに某甲を印すること勿れ、淨祖曰く脱落々々、大師禮拜し玉ふ。

之れ實に我承陽大師の大悟通徹、以心傳心、證契即通して大解脱底の境界になられたる消息である。時に傍に福州の廣平侍者ありて曰く、

外國人恁麼地なることを得たり、實に細事にあらずと、淨祖曰く此中幾か拳頭を喫し、脱落雍容し、又た霹靂す。

と、是れが實に承陽大師の正覺成熟の一大事因縁である。今日參禪の士は老幼男女を論ぜず必ず一度は脱落底の境界に進まねばならぬ、大死一番し來つて初めて再活現成の分があるのである。

今人多くは古則公案に捉はれて、身動も出來ぬやうになり、終には禪病に罹るものすらある、承陽大師は嘉禎二年丙午十五日、始めて山城宇治の興聖寺にて開堂拈香せられ、天皇陛下の聖壽萬歳を祝したつて、而して後衆に示して曰く、

山僧、叢林を経ること多からず、等閑に天童先師に見えて當下に眼橫鼻直なることを認得して他に瞞ぜられず、便ち空手にして郷に還る、所以に一毫の佛法なし、任運は且く時を延ぶ、朝々日は東に出て、夜々月は西に沈む、雲收て山骨顯れ、雨過て四山抵る、畢竟如何、良久しうして曰く、三年一閏に逢ふ、鶏は五更に向て鳴く。

空手還郷と一毫の佛法なしとは承祖にして初めて云ひ得るのである。見よ秋は紅葉に、春は花、鳥は黒く鷺は白い、此身此儘有の儘の解脱であることを知らねばならぬ。

水影を見て大悟せる洞山大師

曹洞宗の起原とも見るべきは洞山大師の宗風である、その宗名に就ては異論ありと雖も大師の正偏綿密の宗風を相承したる者、則ち洞山の流れを酌むものが大師を慕ふのあまり命名したものなることは明白である。

大師は越の國會稽の人、姓は俞氏と云ひ唐の玄宗皇帝の元和二年に誕生された。幼少の折一般若心經を讀み、經中の「無眼耳鼻舌身意」の句に不審を抱き、直ちに丈室に走つて師匠に向ひ「私には眼耳鼻舌身等が皆有りますが、何故に經には無いと云うてあるのですか」と尋ねられた、流石に後世の範たるべき宗匠の幼時は其着眼は非凡である。師匠聞き了つて驚いた、「汝は吾が指導すべき弟子ではない、汝が教導の師は五洩山の靈默禪師なるべし」と、遂に洞山は少にして靈默の會下に遣はされた。大師廿一歳、玄宗皇帝の大和元年に靈默禪師の下で薙髮せられ、間もなく南嶽下の知識を歴訪して南泉普願和尚に法を聞き、又百丈の法嗣たる瀉山靈祐禪師を訪うて彼の有名なる無情説法の話聞き、瀉山の教示によつて當時澧陵攸縣の石室に居られた雲巖無住大師に相見せられたのである。茲に於て大いに機宜投合して、その無情説法の話の提撕により大いに省悟するところあり、遂に一偈を奉つた。偈に曰く、

也太奇也太奇、無情説法不思議、若し耳を持つて聞かば終に會し難からん、眼處に

聲を聞いて方に初めて知るべし。

と云ふのである。それより雲巖に隨侍すること數年、一日雲巖を辭し去らんとして水を渡る時、自分の影が水に映つたのを見て、忽然として大悟せられた。

世間にはかゝる豁然大悟の消息を誤解する者があるが、之は決して偶然の事ではない、既に雲巖禪師の會下に在つて工夫鍛錬の結果、茲に水の縁に依つて一大事を明らかにされたのである。水中に映ずる影と自己と本來一にして不異、二にして非一の道理を徹底せられたのである。時に一偈を作られた、

切に忌む他に從うて覓むることを、昭々として我と疎なり、我今獨り自ら往く、處々渠に逢ふことを得たり、渠今正に是れ我、我今是れ渠に非ず、應に須らく與麼に會して、方に始めて如々に契ふべし

と、後に大師の作にして今日我が洞門に弘く行はれて居る「寶鏡三昧」及び「正編五位」等の玄旨はみな根本が此偈意に含まれて居るのである。

眞桑瓜に釣られし大燈國師

身は見る影もなき一衣一鉢、その一衣すら乞食に與へて敢て顧みざりし大燈國師は、京都四條の橋下に寝ころんでは居るものゝ、これぞ白雲を蓋と爲し、流泉を琴と作すの活手段、流星にも似たる眼は常に三界の群生を離れなかつた。さればその頃流行つた武士の試し斬りに、自ら乞食の群に入つて身を挺し、自己の定力を練り、却つて對者をして翻然悔悟せしめたと云ふ有名なる國師の「河原捨身」は拙著「禪林奇行」(禪學文庫第六篇)に述べた。

憂き事の猶も我身につもれかし

棄てし心の誠をや見ん

とは國師の詠である。斯くて當時流行の乞食を斬つて腰の物の利鈍を試した悪弊は、バツタリ跡を絶つた。けれども國師の和光同塵、乞食の群に隠れて五條橋下を棲家と

するとは例によつて止めなかつた。

挑起大燈輝二天、鸞輿競譽法堂前、風饗露宿無人識、第五橋邊二十年、
 一休和尚が國師の畫像に靈筆を揮はれた有名な贊である。全くこの贊の如く一天に輝く國師の道譽は早くも天聽に達し、花園法皇は深く其徳望を慕ひ、就いて修行がした
 いと仰せ、侍臣をして五條橋下にお迎へにやつたが、何うしても見附からぬ。處が
 人あり教へて呉れた、大燈國師は眞桑瓜が非常の好物であるから、瓜を以て釣り出す
 がよとの事。折しも夏の炎天である、そは忝しとばかり、早速多くの眞桑瓜をば
 五條磧に山と積み「サアこれから貴様達に瓜の施しをやるから誰でも關はん出て來い」
 と云ふ觸れを乞食の群に出すと、多くの乞食は先を争うてやつて來た。最後に五十前
 後の眼光炯々たる入道「眞桑瓜を貰ひに來た」と猿臂を伸した、ドッコイ此方は只て
 はやれぬ「空手にして受取れ」と一撈を下した、すると「空手にして出せ」、此意味は
 瓜はやらうが手を用ゐずして取つて見よとの無理な注文、何と云ふかと思へば、空手

眞桑瓜に釣られし大燈國師

是れをいふ

に出せ、手を用ひずして出して見よ、然らば受取つてやらうと云ふ意味である。恁ういふ工合に擒縦自在に出るものは、到底只の鼠ではない、役人は直ちに彼の猿臂を握つた、果してその入道こそ花園法皇の師事せんと云ふ大燈國師であつた。

俗に海老て鯛を釣ると云ふ事はあるが、瓜に釣られた無類飛切の獲物は、直ちに入浴をさせられ、奇麗な法衣を着せられ「勅命なれば直ちに參内せよ」との事。昨日迄は五條橋下の乞食坊主、今日は圓らず勅命に逢うて清涼殿上の大導師、向上向下、神通遊戯の活手段、佛眼も也た窺ひ難く、千聖も倒退三千里たらん。清涼殿上金毛の獅子、果して如何の策略があるであらう。

清涼殿上の大法戦

頃は元弘四年の正月二十一日、清涼殿に於て盛んな法戦が行はれた。各宗諸山の學徳兼備の高僧が澤山集まつて、大燈國師を相手に互に金玉相振ひ、龍吟すれば雲起り、

虎嘯けば風生ず、毘盧頂上を摩過するの一段に至つては、實に千古の偉觀であつたに相違なく。

先づ第一日には、一問一答で勝敗を決すると云ふ大燈國師の申出での通りに行はれた。最初に現はれたのが山門派(比叡山)の玄惠法印「如何なるか是れ教外別傳の禪」と問ふや否や、大燈國師は忽ち「八角の磨盤空裡に走る」と答へられた、所が流石の學匠玄惠も二の句が出てず、直ちに國師の會下に參じて名を宗叡と改めた。次に現はれたのは三井寺の僧正で、一個の箱を持つて出て云ふ様「これは是れ乾坤の箱也」とやつた、スルと國師は直ちに折り返して「乾坤打破の時如何」と反問せられた、所が僧正は最早一言も述ぶる事が出来ず、其儘國師の弟子になつて宗國と改名した。そこで此二弟子が國師を興に乗せて行つて、即日大德寺の建立に着手したのである。後には之が例となつて、大德寺の住職が定まり始めて參内した時には、其歸りに必ず叡山の僧侶が興を昇いて大德寺まで送ると云ふ事になつた。

然るに教王護國寺即ち東寺の虎聖と云ふ和尚が、法戦は一七日の間繼續すべき先例があるのに、僅か一問一答で勝敗を決するのは甚だ本意であるから、充分繼續して出来る丈けの問答を致したいと申し出たので、今度は大燈國師の代理として南禪寺正眼院長者大光國師が出廷することになった。當時は實に禪の全盛時代で花園法皇はいたくも大燈國師の學徳に歸依し、爾來弟子の禮を取つて、永く心要を叩かれた。

虎聖を陥倒せる大光國師

花園法皇の發願にかゝる清涼殿の大法戦、大燈國師は數名の名僧高德を説破し了つて悠々と引揚げた。續いて禪門を代表して上殿したのは大光國師である。其相者としては虎聖和上の高足某「如何なるか是れ禪」と問うた、すると國師は先づ彈指一下して「此聲梵天に徹す、爾聽き得るや否や」と答へられたので、直ちに敗北して了つた。續いて南都六宗の碩學が替るゝ出ては問答を試みたが、いづれも敗闕を取る者

ばかり、國師の舌鋒は吹毛の劍の如くてあつた。

いよ／＼最後の日はなつた。遂に東寺の虎聖自身が現れて「如何なるか是れ禪」と問を發した、大光國師直ちに「箭既に絃を離れて返回するの勢なし」と答へられた。そこで虎聖和上も「我が宗も亦是の如し」とやつた、所が國師は「的何處にかある」と云はれた、虎聖もさるもの「盡大地是れの」と答へたので今度は國師は扇子を舉げて「爾試みに射看よ」とやられた、やがて虎聖は「中れり」と答へたから、國師は重ねて扇子を袖にして「爾射看よ」虎聖云く「箭既に盡也」と、國師曰く「吾が宗を知らんと欲せば猶ほ白雲萬里を隔つ」虎聖曰く「聞くを得べき哉」國師曰く「近前來、爾に向つて道はん」惜しむべし虎聖、國師の著語に釣り込まれて近寄つて來た所を、國師は咄嗟身を轉じて虎聖を一踏々倒、乃ち蹴倒して了つた。そこで虎聖は通身痛痒を感ずると共に、深く國師の機鋒を徳として忽ち起つて三拜、弟子の禮を取つて名を宗虎と改め、茲に一七日の大法戦會は終了したのである。

大死一番再活現成底の國師の活手段は、所謂禪家の禪家たる所であつて、死んだ教理やへボ理窟を捏ね廻した所で、鳥啼き花笑ふ春の風光には接する事は出来ぬのである。併しながら、先徳の行履のみを見て之を模せんとするものあらば佛祖の賊である。

松に八十往生を誓つた南天棒

臨濟宗の師家濟々たる中に、機鋒の鋭峻を以て第一の名を馳せて居るのは南天棒中原鄧州和尚である。日常得意の南天棒を提げて四方を行脚す、全國十數ヶ所に涉つて道俗の集來する會合を巡次接待して歩くのが自分の願行ぢやと云うて居る。

參禪の士女に對しては惡辣無類、道ひ得るも南天棒、道ひ得ざるも南天棒、其名を聞いてすら戰慄する位であるが、而も一度師の門に入りし者は將來離れない所が妙だ、目下和尚の座下には二千人の居士大姉が居る。

これ畢竟和尚の人格ではあるが、又一つは講演をやらぬからである、口舌三昧の切

賣をやらぬからである、和尚は常に云うて居る「禪の極致は口舌三昧を以て言ひ現はせるものではない。只一器の水を一器に移すが如く心を以て心に傳ふべきである」の一點張。

東京神田美土代町にある大日本禪學道場は例の大石、河野、岡田の南天棒配下の諸氏が築き上げたのであるが、面白い事には開單以來星霜八ヶ年、未だ嘗て提唱もやらねば講筵もやらなかつた。然るに近來一ヶ月唯一回丈臨時「無門關」の拈提を初めた。この閑葛藤却つて一場の狼籍とならんことを恐る。

和尚は殆んど四書の素讀さへ完全になし得ぬ程の人であると云ふが、然も自己の見識で如何なる佛典祖錄もドン／＼讀んで行く、其間も殺活時に臨む底の鋭い氣鋒が語脈裏に現はれるのだ。

和尚近來頻りに八十入滅を説いて參禪の客を煙に捲いて居るが、今年將に七十八、八十迄には二年の壽命、心細い話ではあるが、例によつて壯者を凌ぐの意氣は到底三

年や五年では芽出度ならうとは思はれぬ。尤もこれには因縁のある事で、和尚少壯氣銳の修行時代、八幡の圓福寺に在つて什麼の事を透得せんと從晝至夜の兀坐三昧、終に本堂と達磨堂との間にある底無し井戸に一枚板、其上に坐つて専心工夫せられた。其記念として井戸の傍に松を植ゑ「松が先きに枯れるか、柄が先きに死ぬるか、たとひ松は枯れても柄は決して八十迄は死なぬぞ」と誓つたのである。

若し目的通り八十まで生きられたら、さて其先はと問ふ人があれば、和尚は言下に「老趙州のやうに行脚と出かけよう」と呵々大笑。その松が今では露堂々と生太つて居る。其高さ凡そ十五間餘、目通り七尺餘もあつて實に天を衝くが如き有様になつて居ると云ふことである。

喫茶喫飯底の常濟大師

後村上天皇より佛慈禪師の諡を賜ひ、後桃園天皇より弘徳圓明國師の諡號を、更

に明治四十一年明治天皇より常濟大師の諡を以てせられたる總持寺開山瑩山紹瑾大和尚は穩健綿密の宗風を以て末世の徒に範を示された。

「觀音の申し子」と云はれた大師は八歳の時、建治元年四月八日父に伴はれて永平寺に到り、親しく孤雲禪師に謁して其弟子になられた。十三歳の時祝髮して具足戒を受け、比丘の姿となつたのであるが、不幸にも禪師の遷化に逢ひ、爾來徹通義介禪師に參することゝなつた、此の間刻苦辨道、晝は深山に入つて薪を取り、夜は堂裡に坐して只管修行すること多年。十八歳にして禪師の許を辭し、山遠く水遙かに遍歴の途に上り、諸方の知識を訪うて其心要を練られた、然るに正應二年春三月、徹通禪師は錫を加賀の大乗寺に遷さるゝに及び、歸來本師の鉗鎚を受けつゝ苦學精勵六ヶ年、一日禪師が「平常心是道」の垂示をせらるゝを聴き、忽然として一大事を了畢し、叫んで曰く「我れ會せり」と、時に徹通禪師曰く「汝作麼生か會す」大師曰く「黒膝の崑崙崙夜裡に奔る」禪師曰く「未在更に道へ」大師曰く「茶に逢うては茶を喫し、飯に逢

うては飯を喫す」禪師曰く「この漢向後大いに祖風を起さん」と、此の一語は實に印可證明の一着である。

後、定賢律師と靈夢の感應によつて總持寺に遷られし事と、元享三年後醍醐天皇十種の勅問に對する大師の奉答とは今尚ほ世に流布して有名なる話である。

正中二年八月十五日の夜半、會下の一僧を召して將に最後の垂示を門弟一同に與ふべく

吾れ化縁既に盡きて泥洹の時至る、當に鐘を鳴して集むべし

と、即ち偈を書して坐脱せられた、其垂示に、

念起是れ病、續かざる是れ藥、一切の善惡、都て思量すること莫れ、纒かに思量に涉れば白雲萬里。と。其遺偈に曰く

自ら耕し自ら種ら閑田地、幾度か賣り來り買ひ去て新なり、限りなき靈苗繁茂の處、法堂上に鍬を挿む人を見る。

と、凜然たる句裡に、穩健の見地を窺べく、大師の宗風は蓋し奇警に陥らんとする現代には尤も適切なるものである。

願行の模範たる復古翁出山

曹洞宗の命脈たる師資面授一師印證の寶規を回復して、宗乘の神聖を永久に保全したる復古翁出山禪師は、獨り宗弊を革正して宗綱を振肅したる功業に於て偉大なる高僧たるのみならず、其知見及行持共に千古に卓越して、一生の言行は盡く萬世の好典型と稱すべきである。されば、

「夫れ傳法の鴻規防潰え堤決し横流して天下に汜濫すると蓋し亦年あり、有識の士當時に輩出して力め排して面り折き論ずると確く慮かること切なりと雖も、救ふこと能はず、師粹然として一度出て宗綱の將に頹れんとするを整へ、人々をして佛印を佩び、祖圖に上りて名、實に愧ること無きに至らしむ」

と稱揚したる權大納言源孝重卿の碑文は、決して師の道業に對して過稱ではない。洞門の一大事たる傳法相承は所謂一師印證面授稟て、師匠と弟子とが面り授け面り受け、傳法の師が一人にのみ限られてあるのが、室内緊要の大事であるに拘はらず、戰國の時代より次第に倍害を生じ、禪師出世の頃には殆んど其極に達し、寺院を換ゆれば又更に嗣法を改むると云ふ様な有様で、傳法の系統は全く支離滅裂の状態であつたのである。根本の大事既に紊亂することは是の如しとせば、其枝葉たる宗門の儀禮行事等の頹廢は推して知るべきである。

師は一度此有様を看取するや、涙を流して之を歎かれた。自ら身を挺して之が矯正を企てんか、將軍ろ他の宗派に趨りて累を免れんかと、幾度か思ひ幾度か慮かりたる上、終に斷然此弊風を打破して古風の淳真に復せんとの大決心大誓願を發せられたのが、寛文三年二十八歳の時であつた。それより關三ヶ寺の中龍穩寺總寧寺を訪うて時の住職に志を告げたが、何れも其志には否認をせぬが、時季尚早しと云ふ様な

挨拶。師は悶々の情を抱いて、其翌二十九歳の時、自ら正法眼藏を手寫して序を作り只管に高祖の聖蹟を慕つて、道業を勵まれた。其歳の永平忌に

大法興衰不_レ耐嗟、每逢_ニ祖忌_一濕_ニ袈裟_一。

の偈は蓋し師が畢生の偉業たる復古の鴻勳を彰はすべき端緒であつた。

翌年、江戸に出て、萬松育州和尚の大會に於て第一座に任ぜられ、後一線和尚の下に於て接衆爲人の任に當り、爾來數ヶ所の請待を辭して諸國行脚の途に上り、黄檗の隱元、木庵の兩禪師を初め四方の知識を訪ひて、自己の道念を養ふと共に時の到るを待つて居た。

寸善尺魔は世の習ひ、師の正々堂々たる美譽も進めば進む程、種々なる口實を構へて妨害を試むものが澤山あつたのである。然れども其誓願金鐵の如く、一身を捧げて大法の爲めに盡さんとの大勇猛力は、獅子一吼して百獸腦裂するの概があつた。是に於て臨濟天台眞言淨土等の宿徳も亦翕然として之を贊助し、殊に麻布なる瑠璃光寺田

翁和尚の如きは官衙に強訴して師の事業を資けた。寺社奉行も遂に師の熱誠に動かされ、漸く臨濟の宗匠や天台真言の碩學等の意見をも徴し、且つ永平總持の兩大本山、關三箇寺、江戸三ヶ寺、宇治興聖寺加賀の大乗寺等の住職にも諮詢し、幾度か師を召喚して綿密なる取調べを遂げた末、最後に師の訴願を採用して鈞聽に達する事となつたのである。

元祿十六年八月七日に始めて鈞旨下り、特に永平總持の兩大本山に命じて嚴重に一師印證師資面授は佛祖の鴻範なるを以て盡未來際微塵も之を濫るべからざるの條目を立てしめ、五大閣老、三奉行連名にて海内に令した。是に於て始めて亂れに亂れし宗門の大事も正儀に復し、一切の流幣は悉く之に因つて革正することが出来たのである。是れ實に師が六十八歳の時であつた。師は二十八歳の頃より宗統復古の志を發して將に四十年目である。

あゝ復古翁山禪師、正徳五年八月十九日、寂を示してより二百餘年、法流滔々と

して今日に及ぶ、誰か師が一代の偉業を回想して涙なきものがあらう。

石川素童禪師參禪の經路

精力絶倫、機巧縦横、よく繁雜なる事務を整理して行く腕の人であると共に、人心を觀破するの明に至つては實に精妙を極め、同時に室内に在つては參禪者の足音を聞いても、其方寸を判斷すると云ふ。これを禪門の霸王、努力主義の權化として、英名を轟かしつゝある石川素童禪師である。

禪師は天保十二年、處は日本佛教の中樞地、名古屋市大曾根に呱呱の聲を揚げた、父の名は道家祐七、師は其三男であるが、代々佛教篤信を以て聞こえた家柄である。特に祐七氏は夙に志を茲に傾け、日常閑を利して柳原の豪朝律師に參得して其教化を受け、常に其門風を慕うて自性を磨き、自他の法蓋を心掛けて居られた。かゝる家庭に成長せる禪師は、幼にして既に其感化を受け、胸中一點の光明を認め

て居た矢先、同所關貞寺に於て盛んなる江湖會が嚴修されたのである、其西堂は名にし負ふ白鳥鼎三老漢であつた。

頃は三月彌生の春、黃鳥飛んで法華實相の妙音を傳ふるの時、鼎三老師を戒師として同寺に授戒會が營まれた。父に伴はれて戒壇の末席に連なりし禪師の心中は抑も如何なりしぞ、願くは我も出家となり、かゝる名僧ともなりて多くの人々を救はゞやと、發心茲に兆して、歸來父に頼み遂に其志を遂げしは、其年十二月八日、釋尊一見明星、大悟徹底の勝蹟を偲ぶ成道忌に、初めて剃髮染衣の身の上とはなつた。

昨は紅顏の美少年、あたゝかき親の膝下を離れたる今は圓頂黒衣の一沙彌、朝は未明に床を蹴つて只管に讀經、夕は幽なる燈火を挑げて懸命に漢籍を學んだ。かくすること數年、蛟龍何ぞ長く地中に潜むべき、安政四年師乃ち十七歳、天台笠に袈裟文庫、麻衣の裾をキリ、とからげ、飄然として師の膝下を離れ、三界を住居とする行雲流水の、處さだめぬ旅の空、行脚の途次に就いたのである。

當時心の中に思ふやうに禪僧は禪を以て世に立たねばならぬ、紛々たる學理解説、如何ほど高尚深遠に學び修めしとは云へ、そは禪眼に觀破せんには只これ一個の學窮奴、願くは専心呼吸下の禪風を鼓揚して禪僧の本面目を發揮せんには加かず」と。

撥草參玄の正師を選んで、長門國深川太寧寺に化門を開きつゝあつた分應和尚に參ずる事に決心した。百數十里の山川を、單身重き複子を荷うて、行程約一ヶ月にして漸く辿り着いたのが分應和尚の會下である。

交通未だ開けざる長途を遙々慕つて來られた禪師の道心を是として、分應和尚の提撕は尤も慇懃なるものであつた。その夏安居入衆時に於て、和尚は禪師に示すに「百丈咽喉併却の話」を以てせられた。爾來七尺單前に端坐して日夜を辨せず、専心工夫三昧、開枕に至るも未だ曾つて横臥せし時なく、禪師の道力愈々昌んにして和尚の提撕益々親密を加ふるに至つた。

同年臘八攝心會となるや、和尚大衆を接得して精神激勵、寒風肌を劈く十二月五日、

夜は深くとして三更を告ぐる鐘の音も次第に幽韻に響く頃、和尚は警策を携へて接待に回つて來られた。直ちに禪師に向つて三頓の棒を下された、禪師棒下に省あり、和尚又打すること數下、即ち問うて曰く、

「併に却咽喉唇吻、作麼生道。」

と、禪師答へて云く

「終日說無、答レ口」

和尚云「語不離窠臼、焉能出蓋纏。」

答云「和尚憐兒勿忘醜。」

和尚云「不于唇吻、而更道、將言辭。」

答云「徐行踏斷流水聲、縱看寫出飛禽跡。」

和尚茲に至つて打すること三十棒。

又云く「可惜許」と、仍て禪師は開口一番「和尚の印可を謝す」和尚歸方丈、時に

禪師は追躡して入室するや、和尚起つて打たんと要す。問一髪を容れず、禪師は和尚を推倒して打すること數拳、和尚曰く「禮拜着」と、仍つて禪師は拜一拜して曰く「大慈大悲」。

其後分應和尚に暇を告げて、更に信州松本の全久院雪巖和尚の會下に投じた。以來禪師は精勵刻苦、參禪を怠らず、遂に印可を得て曉天夜坐には代策を引き、其峻嚴なる機鋒は却て衆僧の恨みを受くる場合すらあつた。かくて雪巖和尚の會下に居ること二ケ年餘、將に送行せんとするや、和尚垂示して曰く、

宗風順納動郷心。携手當門叮囑頻。

假令高眼誇雲間。爭加歸衆隱全身。

禪師は爾來この垂示を以て精神といはし、未だ一日と雖も忘却せしことなく、爲めに獨居安樂を貪らざる所以である。

其後、更に美濃大垣全昌寺に良範和尚を訪うて證上の修を打して勉勵苦辛、屢々辛

辣なる鉗鎚を蒙るも、精進渝らざる事併せて前後二十年。

明治三十八年五月、一宗の興望を負ひ、推されて大本山總持寺貫主となるや、時代に順應して本山の移轉を決行し、再建事業に方りて、奮進の意氣は壯者を凌ぎ、萬難千障を透得して、今日あるに至りしは、蓋し古今多く其の比を見ざるところである。

趙州一僧の爲めに大道を説く

道は何れにありや。世人動もすれば、法幢を建て宗旨を立す、一隻眼を具して十方を坐斷する底の漢にあらざれば道を體得し難きものと心得て居る者が多い。

昔は趙州從諗禪師、南泉普願和尚に問うて曰く、「如何なるか是れ道」と句裡に機を呈して劈面に這箇の一事を得んとせられた。和尚言下に「平常心是道」と答へられたので、趙州翻然として省悟せられた。「平常心是道」の一句は實に蓋天蓋地である。然るに他日一僧ありて趙州禪師に問うて曰く「如何なるか是れ道」と嘗て趙州が師の南

泉に問われたと同様の句を持つて來た、師曰く「牆外底」牆根の外にあるぢやないか。すると僧曰く「這箇の道を問はず」そんな道を問ふのではありませぬと、此僧未だ本分底に達する事甚だ遠く趙州の示されたる露堂々の大道も摸索不著であつた。師曰く「那箇の道を問ふ」然らば那箇道を問ふのか、僧曰く「大道」大きな道を聞くのです、亦是れ目前の機に非ざるを看取したる老趙州、問一髮を容れず「大道は長安に透る」ウン大道か、大道なら帝都の長安に透つて居るぞ。

元來一味平等の大道、靈光不昧の斯道は、牆外底直に禁裡に達す、王公も行き庶民も通る、遠く千里に達せんには、先づ脚跟我簷下に發せねばならぬ。無孔の鐵鎚重ねて楔を下すに逢うて這の僧果して合點が參つたか怎うか「道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非ず」阿屎放尿喫茶喫飯、語默動靜一機一境の間にも、常に坦々たる大道の上に立つて働きつゝあるのではないか、然るを特に大道に迷うて鎖を打し枷を敲くが如きは、恰もわが頭腦を失脚せりと尸羅婆城下を騒ぎ廻つた演若多のそれにも

似て笑止至極の事である。見よ靈雲は桃花を見て悟り、香嚴は竹に當れる小石の音を聞いて悟り、元曉は死屍に溜る水を飲んで廓然大悟したではないか。

五祖會下の第一人盧行者

震旦第五祖大滿弘忍禪師、凛々たる孤風自ら誇らざれど、識高く學博ければ遠近來り學ぶ者甚だ多き中に、一日蓬髮垢面身に襤褸を紆ひたる一介の乞食、來つて禪師に參謁を乞うた。師曰く「何の要ぞや」「我は盧行者と申す者、唯作佛を求む、如何なる職業にても與へ給へ」と云ふ。禪師之も衆生濟度の一分と思唯し「槽廠に着き去れ」米春部屋へても行つて居れとの事に、彼は其意を領し禮拜して臺所の方に行き、日々薪を割つたり米を舂いたりして居た。便ち碓坊に起臥して杵臼の間に服勞すること數ヶ月。

或日の事、禪師は一山の大衆を一堂に集めて云はるゝには「正法解し難し、徒らに

吾が言を記し以て己が任と爲すべからず、汝等各自ら意に随つて一偈を呈露せよ。若し語意冥符せば即ち衣法を皆付せん」と。徒らに天邊の月のみを貪り見て却つて手裡の寶玉を失却するの傾向を誡め、同時に寰海に端坐して龍蛇を定むる向上の大機を抜抽して、大法を傳付せんとする婆言である。

七百有餘の雲兄水弟、何れも吾れこそは大法の傳持者たらんと欲し、各々平常修行底の眼目如何と、今更に腦漿をしぼつて安心會得の領解を掲げんと、筆太に認めたる所解の一句を掲げ、先を争うて廊壁に走り、見るくベタ一面に貼り付けられた。中にも

身是菩提樹。心如明鏡臺。時時勤拂拭。勿使惹塵埃。

上足の高弟神秀の偈頌は、特に他の一切に秀て、賞嘆せられ、大法の付囑者は必定此人にありと羨まぬものとはなかつた。

然るに唯一人碓坊中の盧行者のみ、喧騒の中に寂然と之を聞き了つて「可は即ち可

なりと雖も了未了矣、惜しむべし其意未だ至らず」と。強いて一僧に筆を執らしめ、誦出せる所は

菩提元非樹。心豈明鏡臺。本來無一物。何處惹塵埃。

乃ち神秀の頌と並べ掲げられた。衆僧之を見て愕然たらざるはない。

其日の夕刻である、師の弘忍禪師は參堂して廊壁の偈頌を點檢し窃に首肯するところがあつた。夜半禪師は只一人碓坊に至つて盧行者に問ふ「米春けたりや」行者直ちに答へて「米精け畢んぬ。未だ篩はざるのみ」禪師默然、杖を以て臼を打つこと三下。行者亦無言の間に米を篩ふこと三度。師弟相見て莞爾。其夜三更人靜るの時、盧行者は碓坊を出て丈室の扉を叩き釋尊以來嫡々相承の涅槃妙心、實相無相の大法を傳へられた。

達磨大師震旦に初めて法を傳へられてより既に五代、五祖の弘忍禪師は前にも述べし如く、學徳一代に秀てたる大禪師である、然るに六祖と仰がる、盧行者慧能和尙に至つては、眼に一丁字なく、口に些の辯才なし、只黙々として此間に慇懃の事を得たるのみ。而も智あり學ある數百の子弟が、力めて得ざりし師の衣鉢を相續するを得たのである。

白隠に參じて剃髮せる大橋太夫

白隠禪師の會下には多くの大姉があつた。中にも阿察女、杉山政女の如きはその見地恰も久參底に似て、錚々たるものである、其他にも多少知られたものはあるが、彼の京都島原の名妓大橋太夫の如きは、禪師の年譜に記せるを見ても、察するに必ずや深く徹證する所あつたに相違ない。彼は決して尋常一様の遊女ではなかつた、その流麗なる文彩と洒脱の境涯と犯すべからざる權威とは、容顏花の如き楠楠姿と對照して、二代大橋と引手夥の其間にも、無限の妙味を發揮した事であらう。嘗て人に請はるゝまゝ認めやりしと云ふ「遊女の畫賛」の如き、いかに文詞をよくせしかを窺ふに足る

白隠に參じて剃髮せる大橋太夫

のである。曰く、

西にながれ東にながる、同じ川竹の身にしある中にも、八重垣つくと詠じたまひし八重垣のほとりは、いともやさしく、繪にかけるを見てさへ、まことなつかしうおぼゆ、しかはあれど、このふたりのすがた、こゝにかきあらはさるゝときは、ありやなしや。

一見洒脱自在の其中にも、女性の優しさは自ら偲ばるゝてはないか。然り彼女は亦血もあり涙もあつた、今日に傳はる歌の中にも、

わするなと契りし春は夢なれや、寢覺とひくる初雁の聲 (自畫の贊)

よそにみておもふもつらし身の昔、うき河竹のさとの夕べは (老後鳥原を過ぎて) 蓋し詐らざる實感であらう。彼の胸中はいつも清風明月を拂ふが如く、漢來れば漢現じ、胡來れば胡現す、聲に彰れ色に彰るゝ遊戯三昧。これ程の婦女子が何故あつて思ふもつらさうき河竹流の里に身を投じたものであらうか。白隠禪師と印資印證の一

事を叙する前に、しばらく彼女の前半生を述ぶるのも、亦禪餘の一興ではあるまいか。

大橋實の名を律子と云うた。父は元徳川の旗下にあつて一千石を食みたる武士なりしが、如何なる故ありてか、一旦退糧して後はその妻及大橋小弟某の三人を携へて、いさゝかの由緒を便りに京都に來た。花の都の日は暮れ易く、五日十日と過す間に、旅要の餘りは費ひ盡され、桐の一葉の落ち初めたる秋風に、物の哀れはこれよりぞ知る、赤貧洗ふが如く今はその日々の細き煙さへも立てかねる有様。深窓に育くまれたる大橋も、うき荒浪の寄せ來ては、最早坐視するに忍びずと、女心の一筋に親を思ふ真心から身を犠牲にして金に替へんと堅き決心を兩親に語つた。「武士は食はねど高揚子」現在我子を活りて安穩を食るはこれ畜生道、我老いたりと雖も徳川の流を拘みし武士の片割れ、よしや此儘親子四人、共に餓死するともまゝよ、以ての外なる汝が願ならぬ、許さぬの頑固一點張。この父を説き伏せて、自ら身を河竹の流に沈め、一家の生命を繋いだ律子、事の善悪は別問題として健氣な心の中を察し得るではないか。

大橋太夫とは律子が源氏名である。意氣と張と顔と姿の四調子、揃ひも揃つた絶世の美人、加ふるに縦横の文彩と音律、茶香の末技に至る迄、一としてその道の奥義に達せぬものとはなかつた。忽ち唄はるゝ全盛第一、鳥原廓中の三千の粉黛をして顔色なからしむる今の身も、思へば淺間しきは流の里、悲しきに笑ひ、可笑しきに泣く、うかれ男のもてあそびに任せて明日をも知らぬ唇氣樓、自ら入りし苦界とは云ひながら、何たる因果の事ぞと、思念漸く深く、遂には顔色衰へ、身は篋れ果て、醫師も匙子を投ずるに至つた。

偶々大橋の前身を知つて足繁く通ひ來たる某大名、この様子を見て、殿に禪の要旨を説き、「行住坐臥、見聞覺知の一々に向つて如何と徹見せよ、切々に省察して怠らざれば、よしや身は苦界にありと云ひ乍ら、本具の佛性は忽然として現前せむ」と物語り了つて飄然と歸つた。

爾來、大橋は専心一意佛性を徹見せんと一切の客を謝して、夜を日に繼いでの修行

三昧。一日、一天掻き曇つて見る間に閃く電光に、續いて起る怒雷の響き、天地も爲めに揺がんばかり、當日京都に二十八ヶ所の落雷があつた。如何に激しかりしは此一事を以ても想像せらるゝのである。況して婦女子の身、特に大橋は其性甚だ雷を忌むが故に、深く帳を垂れて二三の召使を左右に侍らしめ、餘りの恐ろしさに震へ上つて居た、が禪的試練は斯る時ぞと奮然として猛省し、他の止むるをも聞かず、起つて椽先に端坐したのである。折しも雷聲俄かに烈しく震ひ、其庭中に隕ちた。時に大橋愕然として仰天し、其儘氣息を絶するに至つた。良久しくして蘇生するや、總ての見聞覺知は昨日と異り、全く身心脱落、脱落身心の境涯となりし事を悟つたのである。間もなく苦界を脱するを得て白隠禪師に謁して徹證することを得た、こは實に寶曆元年の春である。白隠禪師は六十七歳、備前岡山の少林に金剛經を講じ、次で井上の寶福に到つて四部録を講じ、その歸途偶々京都を過ぎて世繼政幸の家に投宿せる折であつた。

後、大橋は栗原一素と云ふ者の妻になつたが、發心求道の志抑へ難く、一素に乞うて髪を剃り尼となり、白隱禪師が法諱の一字をうけて慧林と名づけられた。爾來十幾年、具に辨道一意、生死の關を透得して、轉身の一着を打するに至つた。

星見天海和尚の行履

箇の佛の字を道ふも拖泥滯水、箇の禪の字を道ふも滿面の慚惶。言端語端の兩般に拂らず、恰も枯木龍吟の如く、一生斯道三昧に住して先年逝去されたる星見天海和尚は、洞門の近代に稀に見るの老知識であつた。

和尚が日常の行履愚の如く魯の如して、默然兀坐、名利に恬淡として常に世外に逍遙するの高風があつた。

彼の大雄山最乗寺住山中の如き、明日は愈々退院すると云ふ前夜迄は一山の大家に少しも知らせず、突然退院上堂の式を行ひ、一杖一笠袈裟行李を首に掛けたる一介の

雲水姿、飄然として門を出て、大衆の送るのも固辭したと云ふ。瑠璃殿上知識なしのたとへ、老杉古檜の鬱蒼たる大雄山も、わが天海和尚にとつては、あまりに對揚貶剝の煩に堪へなかつた。さなり千古の道場も、樹下石上も和尚の爲めにはさしたる相違はない。退隱後は遠く越路を辿り弟子の住山地たる一閑村に在つて從容坐禪三昧に晩年を送られた。

現曹洞宗大學教授原田祖岳和尚の如きも、深く和尚の高徳を慕ひ遙々越後へ赴かれた一人である。和尚の家風は一面に於ては孤危峻峻、惡辣無類であつた、決して筆舌を以て拖泥滯水、家醜を露現するが如き事はなかつたのである。其一例として、或年の夏長岡市の有志相計り、佛教夏期講習會を開催すべく總ての準備を整へ、聽て其講師に和尚を請聘せんとして幹事は恭しく拜請に參つた、すると「納は佛法の切實りに出かけるのは御免ぢや、聽きたくば聽かしてやらう、當方へ來なさい」との挨拶、何と哀願しても許容せず、已むを得ず、講習會は中止して了つた。近來は洞門の宗師

家中授戒會や江湖會の押賣すらあると云ふ、如何に大法宣布と謂ひながら、深山幽谷に居して一箇半箇を度するを宗風とせる高祖道元禪師の精神を閑却するの甚しきものではあるまいか。和尚の如きは蓋し承祖の遺訓を體得せる眞の宗師家であると謂つても決して過言ではない。

乍併、和尚は他の一面に於ては詩を能くし、又書を能くす、而も筆端雲を呼ぶの剛氣と、一字の假名文字すら等閑にせざる綿密とは實に天下一品である、けれどもこは和尚の餘技に過ぎない。其眞情の流露するところ恰も慈母の愛子に對する如く、諄々とし説き切々として述ぶる隱密の高風は、今日其尺牘を一見するもの、等しく涙を流して感ずるところである。

或時は截鐵斬釘、或時は低頭佇思、これ禪者の眞面目にして、和尚の脱體現成底である。今後の洞門果して第二の星見天海出づるや否や。

楠田病院長の九寸五分

東京日本橋の濱町に楠田病院と云ふのがある、院長楠田謙藏氏は單に國手として斯界に名あるのみならず、禪客として南天棒の衣鉢を嗣ぎ、頓に金剛坐を挫破して光風清月裡の日送りをして居る。

楠田氏の發心の動機は一種の厭世觀で容易に解決の出來ざる幾多の問題に逢著して苦しんで居た。其矢先、氏の同窓の友人なる某醫士が醫學界を去つてより消息を絶つこと七八年、何をして居るかと思つて居ると、偶然一日氏の玄關を訪れた。「君は今何をやつて居るのか」と聞くと「禪をやつて居る」との事、「禪とは一體如何なるものか」と楠田氏の反問に對して「さて、何んなものかと聞かれて見ても中々一口には云へぬが、まあ死ぬ位の事はなんでもない様になる修養だ」と云はれて「それは面白い、僕もやつて見たいが、其師匠があるか」と聞けば「ある、目下小石川の白山に道場を開

いて居る南陰和尚と云ふ人がある、君も志があるなら和尚を訪れて見玉へ、折柄、厭世思想の渦中にある楠田氏は、友人の話を聞くや、直ちに和尚を訪問しやうと云ふ氣になつて、先づ和尚の心膽を試みると九寸五分の短剣を懐にして、小石川白山の境内に足を運んだ。道場に刺を通ずると一向風采の揚らぬ老僧が墨丸をアブリ乍ら、取次より受取つた名刺を眺め「久し振りぢやのう」と云ふ。氏は何だか狐にてもつまゝれた様な氣がして「イエ初めてお伺ひ申したのです」と云つたまゝ呆然と老僧の前に進むと「左様か、お前は醫者ぢやと云ふから、柄は佐々木かと思つたに……何しに來たのぢや」斯う云はれて見ると、老僧の心膽を試むべく懷中に吞んで來た九寸五分は何の用にも立たぬ。押して禪の大意を問へば、

「禪は別に面倒なものぢやないよ、お前が醫者なら、深切に病人を見て、家業を一生懸命に勤めさへすれば、それが禪ぢや、もう用はない、歸れ！」

との挨拶、何だか其日は不得要領で歸つた。

其後再度出かけて、所謂友人の云ふ「死ぬ事位何でもない」禪の極致を聞かうとしたが、矢張老僧は相手になつて呉れぬ。南陰老漢の鑑機は實に此處にある、惜しむべし楠田氏は老漢の爲人を看取することは出来なかつた。訪ふ事三度、例に依つて例の如き態度、茲に於て楠田氏は大いに立腹して、

「私は不肖ながら獨立して一の病院を經營して居る非常に忙はしい中を、態々お訪ねする事三回に及びました。素より道の爲の不惜身命は覺悟ですが、少しも相手になつて頂けぬのは誠に残念の至りである、最早再びお眼には懸りますまい。」

と奮然として坐を起んとした。南陰老漢初めて微笑を浮べ、氏の肩を叩いて「お拜せい〜」と云はるゝまゝに拜了ると、初めて「趙州無字」の公案を與へて呉れた。此公案に參ずると滿二年、初めて無字の三昧を會得した積りて、老漢を訪ふと「まだ〜」と云ふたまゝ、決して許して呉れぬ、其後尙一年有半にして初めて桶底を脱する快活不徹の域に達することを得た。便ち老漢を訪ふに、果して顔々相對するや、直ち

に氏の脚下を洞觀して此事を了せる證明を與へられた。茲に於て生死の二見を離れ、從來の煩悶は昨夢と消え益々斯道に勉めんことを覺悟した。

「頭燃を救ふが如くせよ」と云はれた古人の金言、實に味ふべきではないか。

尼の侮辱に發奮せる俱胝和尚

指一本。之を用ふる事自在なれば、或時は龍の水を得るが如く、或時は虎の山に靠るにも似て、應機接物、殺活自在、一生受用不盡底なりしは彼の俱胝和尚である。されば今日に至る迄、苟も禪を知るものは「俱胝一指頭の禪」と云つて、殆んど知らぬものはない位。

昔も今に等しく禪門の流を汲む者は多くありしとは云へ、一莖草を拈じて丈六の金身と作すが如き作家の漢は多くあるものではない。文字言句の枝葉に奔つて、これが吾家の珍寶と濁合點の輩は、恰も寒狗の塊を追ふが如く、支那は四百餘州、南頓北

漸の差別はあれど、彼方の山にも此方の寺にも澤山あつた。俱胝和尚もお仲間には漏れぬ一介の禪僧、普通の小寺に住持となつて、せめては佛大事に朝夕看經する位が關の山であつた。この儘一生終つて了へば、矢ッ張たゞの俱胝和尚であるが、ある日思ひもよらぬ大事件が起つた。

黄昏近き或日の事、和尚は例によつて看經しようとして佛壇へ燈火を點じた、折しもぬつと一人の尼さん「御免」とも何とも云はずに、いきなり本堂に上つて來た、和尚は吃驚、見れば笠を被つたまゝ、草鞋も穿いたまゝである、和尚のうろくして居る様子を眺めて、大間の真中に敷いてある和尚の坐蓐の周圍をグルグルと三遍まはつた。賊に眼中和尚なしと云ふ振舞。而も其聲のみが優しい女性ながら、言ひ草が惡らしい。「道ひ得ば即ち笠子を下ささん」和尚さん、一句があるならお云ひなさい、それを聞けばこの笠も脱ぎませう、草鞋も捨て、禮拜もしませうが、さあ如何て御座ると云ふ勢。和尚一向に口が開かない、イヤにからんだ尼さんの言葉に、何と返辭をしてよいやら、

眼ばかりバクつかせて居る。尼さんこの有様に愛想つかしたのか、この馬鹿和尚がと云はぬばかりに、何の挨拶もなしに本堂を出ようとした。時恰も諸山に響く黄昏の鐘、「如何です、泊つて行かれたら、日も暮れかゝつた、何れ何處かに泊らねばなるまいに」と俱胝さん大いに親切心をほのめかした。尼さんすかさず遣り返す、「道ひ得ば即ち住まらん」衆流截断の一句も可なり、隨波逐浪の一句も可なり、何とか云うて聞かさつしやい、そんなら投泊もしませう、仰せは何でも聞ませう、とやさしい中にも凍たる一言、求道の至誠は焰の如く燃えて居る尼の様子に、俱胝またも答が出来ぬ。浅草花屋敷の据人形そのまゝに口あんぐり。尼さんも、何んだヤクザ和尚、助平坊主がと、嘲る心を姿に見せて、サツサと出て往く不敵の姿！

その後姿を眺めて居つた俱胝和尚、兩眼に熱涙を湛へて沈思默考、身は苟も圓頂黒衣の出家姿、心は三界の繫縛を脱して禪門に入り、許多の葛藤公案を透得して佛祖の大機も掌握に歸し、人天の名脈も指呼に受くべき身が僅かに一小尼が等閑の一句一

言に、何の答も出来ぬとは、何たる耻かしい情ない事であらう、最早一刻も平然として居る時ならず、と觀念の眼を開きて、寺も何も打捨て、天下遍歴の鹿島立。あらゆる名匠師家の門を叩いて實參實究、具さに辛勞を嘗め盡して、やがて到り得たのは馬祖道一門下の尊宿、大梅法常禪師の法嗣たる天龍和尚の會下である。此人ならばと運水搬柴の辨道を怠らざる事數年、一日尼に襲はれたる昔日の物語をして佛法の大意を問うた。すると天龍和尚、何も云はずに、スツト指一本立てた、その刹那、俱胝は豁然として大悟し、從來の大疑團を氷解するに至つたのである。

神機縦横の狼玄樓

文化十年、九十四歳で遷化せられた玄樓和尚、人呼んで狼と稱し、其名を聞いてすら縮み上つた位、敢て狼のその如く人の肉を喰つた譯ではないが、其接待の手段惡辣を極め、道の爲には苟も一點の人情を假さなかつた爲めである。

和尚諱は奥龍、女樓とは其號である、別に蓮華海と稱した。九歳の時出家して長壽寺齡峰和尚に就て得度した。其穎敏の神機は早くも作家の知識を瞠若たらしめた事が往々あつた。和尚十三歳の時海に航して偶々颶風に逢ひ、狂瀾怒濤の逆捲くところ、見る間に和尚の乗つた船は木の葉の如く弄ばれ、遂に覆つて了つた。和尚は幸にして溺死の難を免れたが、心竊に生滅無常の有様を思念して胸中甚だ穩かならず、萬物の世に於けるは、恰も人が船に乗つて大海に在るが如きものである、船に成壞あれば人に生滅あり、萬物にも各々轉變代謝がある、故に世界も亦終始がなくてはならぬ、その終始は果して何時であらう。

と、老師家某に參叩した、すると其答が「無始より始まる」と只一言、和尚更に問うて「終があつて始めのないものはない筈、その無始の始とは何時であらう」と聞いた、老師家は「それはお前が後日自ら悟ることがあるであらう」と云つた。

和尚この一語を懐にして爾來切瑛究明寢食を忘れて此事を工夫した。これが年齒

漸く十三歳の時である。十九歳にして齡蜂老の膝下を去つて天下の宗匠を訪ふべく諸國行脚の雲水姿、普く歴參したが、當時の師家は概ね凡聖に捉はれたる胡亂の提携、到底他に據つて這箇を會得するは難しと觀取せる和尚は、獨坐大雄峰の意氣を以て、獨り閑寂なる別天地を求めて、白雲を蓋と爲し、只管に冥想三昧に入つて、打成一片に參究した。既にして五ヶ年、石上に踞して勇猛に辨究し、將に曉にならんとする一日、遠寺の鐘聲樹間を縫うて股々と響き渡る、その音を聞いて豁然として大悟。

曉應二鐘聲二天地開。日輪果自二大東一來。是何道理吾無識。不覺呵々笑滿腮。とは此間の消息を打した一偈である。時に和尚は二十四歳であつた。是より悟後の修行に苦心した事は勿論であるが、何事も詰込主義の教育でなくては人物が出来ぬと心得て居る現代の人々は、少しく往時の偉傑、狼玄樓の修行を參酌して欲しいものだ。

いづるよりいるまで浪のうへにして
山のはもなき月をみる哉

(慈鎮和尚)

澤庵和尚江戸入の真相

澤庵和尚、名は宗彰、但馬の人である。徳川三代將軍及諸侯等を化導して普く天下に偉名を傳へらるゝに至つた。劔道の達人柳生宗矩に心要を授けて、殺活自在の妙味を會得させた話は有名なものである、宗矩後に將軍家光の劔道師範となるや、告げて曰く、

凡そ術は唯だ調練思慮して以て自ら得る處あるに至らざるべからず。臣初めたゞ技を練るのみ、一たび澤庵禪師に就て心要を問ひ、之に參じて頗る感ずる處あり、業稍や進むに隨ひ、云ふべからざるの妙あり、將軍劔道に就いて其の奥義を究めたまはんには、宜しく禪によりて悟道したまふべし。

と、乃ち禪師を請ぜんことを勧めた。電光石火に機髪を存する和尚の道譽は普く天下に響いて居たが、嚴冷枯淡は素是れ叢林の常、任運無我の性格は恰も寒拾と手を携へ

て行くものゝ如く、容易に權門富貴に遷く事を欲しなかつた。されば是に先つて、豊臣秀頼その徳を慕ひ、禮を厚くして大阪城に請ぜんとしたが、和尚は頭を掉つて起たなかつた。淺野幸長は自ら南宗寺に到つて相見を請うたが、和尚は裏口より遁れて大安寺に隠れた。その他細川忠興、黒田長政等の諸大侯等皆争うて徴招せんとしたが、固く辭して應じなかつた。こゝに和尚の大識見がある、始めは芳草に隨つて去り、又落花を追うて廻る如きは大丈夫の行爲でない。坐して龍蛇を定め、玉石を分つは衲僧家の本分である。然らば後年如何にして家光の帷幄に參じたか、世には和尚の此一事を以て家康公に於ける崇傳長老の事蹟に比するものがある、之れ和尚の境涯を會得せざる賣文の史家によりて誤られたものであつて、一色氏の子たる傳長老とはその出處進退素より同一の談ではない。

士は己れを知るものゝ爲に死す、と云ふではないか。今澤庵は其秘藏弟子の一人たる柳生宗矩の懇囑によつて將軍家光の心要の師となる事は、波間路なきところ路縦横、

鳥飛んで鳥の如く、何等の會作造作に干からぬ活往來である。

御意ならばかへりたくあん思へども

?(江戸はいやく／＼むさしきたなし) (あまーしきふし)

一綱に打就して驢を渡し馬を渡すの覺悟、和尚が家光公の懇請によりむさい江戸に入つたのは寛永八年である。大徳寺清巖和尚は此間の消息を傳へて曰く、

大猷院殿、柳生但馬守に兵法傳授の時、極意の兵法有無に御會得なきにより、但馬守指圖によりて、澤庵和尚に御對面あり、古則をさづからせ給ふてのち、御得度なされたり。其古則は「萬里一條鐵」と「應無所住而生其心」の二なり。

とある。與奪縱横の端的、殺活自在の妙所を得て、佛法世法ともに成就したる家光の機用は實にこの二則の公案を參究して足實地を踏んだ賜物である。

これより後家光と和尚との關係は益々密になつた。和尚も亦意を決して墮泥帶水、下幾多の諸侯を濟度せんと發願するに至つた。寛文十五年品川に地を卜して萬松山東

海寺を創營し、和尚をして開山第一世たらしめたのは、是れ偏に將軍家光が、其深き法恩に酬ゆるの微志に外ならぬのである。

正保二年十一月、和尚四大調はず、家光大いに憂ひ醫を遣はしてその病床を見舞うた。が十二月十一日終に寂を示した。家光其由を聞き自ら東海寺に至り、涕淚數下、哀悼の極、語を發せざりしと傳へられて居る。此一事に徴しても、其崇拜の尋常一様ならざりしを察し得るではないか。

和尚の柳生宗矩に與へて兵法を論じたる書に「不動智神妙錄」あり、禪の心を提けて劍を語る事頗る懇切、更に其著「太阿記」は簡にして要を得たる禪機と劍機の妙を説破したるもの、共に心讀し體讀して、和尚の活骨髓に觸れんことを望む。

秋野孝道師の跣足參り

眼藏家として禪門近代の巨將たる西有穆山禪師の活骨髓を傳へ、綿密の宗風と穩健

なる學殖とを持して、洞門最高の學府に據り、學長として専ら育英の事に方り、時に
 出ては他校に禪録を提唱し、又室に入りては居士大姉を接得しつゝある秋野孝道師
 が、今日の籍甚たる名聲に接する者は、誰か師を天才視せざるものがあらう。けれど
 も何ぞ圖らん我が秋野師に於ては全く勉勵努力の賜物である、苦修練行の結果である。
 師の幼時は非常に物覺えが悪く、聞いたお経は直に忘れ、到庭一人前の僧侶になれ
 ぬかと幾度か自己を省ては潜然たる涙に暮れたことも屢々であつた。師の郷里は遠
 州の相良町六歳の時出家をして川崎在、中村の長興寺と云ふ禪寺に入つた。剃髮の師
 たる慶道和尚は嚴肅一方にして、覺えの悪い師の頭邊には何時も瘤が絶えなかつた。
 小雨淋しき晩秋の一夜、予は麻溪の學舎に師を訪うて當時の追懷談に、覺えず袖を
 濡した事がある。

「八九歳の頃は實に何の位難儀をしたか知れぬ、深夜人靜まるの時、両親が慈愛の程
 を思ふては無限の悲哀に泣いた。烏兎早々十四歳になつたが、例に依つて記憶はよ

くない、如何にしたらばよからうと百方苦心をした結果、神佛の庇護を仰がうと云
 ふ氣になつて、丁度長興寺の門前に白山権現があり、裏山には天満宮が祀つてある、
 それに祈願をしやうと決心して、夜三更、草木も眠る眞夜中を、密かに床を抜け出
 て、跣足參りを初めたのである。境内とは云へ置く霜白き寒中に、唯一心不亂に物
 覺えの善くなりたさに、七日間人知れず祈誓をこめた。」

とは師の直話である。神佛に祈願をしたものゝ、復習の努力は一通りの苦心ではなか
 つた。嚴格なる慶道和尚は夜に至るも、師に行燈をつくることを許さぬ、暗夜に經文
 の復習は出來ず、復習せねば忘却する、忘却すれば三十棒、窮餘終に一策を案じて、
 深更密に本堂に至り、駄線香を三四本持ち來つて、これに點火し、幽に見ゆる經文の
 文字を辿つては復習を續けた。縷々と立上る線香の煙は遠慮なく眼に泌み渡る、斯く
 して勉勵する事數ヶ年、十九歳の時遠州大洞院に於て立職の式を擧げた。

後年西有門下の俊英として其大洞院の住職となり、洞上の耆宿として道譽一代に高

く、遂に日置禪師の後跡として可睡齋を葺するに至つた。實に師は立志傳中の第一人である。

惟嚴禪師と李文公

與奪自在は禪の根本、應機接物は宗乘の第一義。唐の李文公、一日薬山惟嚴禪師を訪れ「如何なるか是れ惡風船を吹いて羅刹鬼國に漂着する底」これは法華經普門品中の句である、惡い風が吹いて鬼の國へ船を流し落とすとあるが、一體どうした譯であるとの質問。時に薬山呵々大笑して「李翱小子、之を問ふ何の爲めぞ」李翱さん、お前の様な坊ちやんが、そんな事を聞いて何にすると、鼻てあしらひ、顎て嘲つて居た。李文公とまで一般に尊敬せられて居る身を、小兒扱ひするとは怪しからぬ和尚ちやんと、一念瞋恚の炎を燃しては、自然顔色に現れて來た。禪師すかさず「あゝお怒りですか、この瞋恚こそ、所謂の惡風、今や船を吹いて鬼の國に赴きつゝある」とやられたので、

李文公成程と合點が參り爾來禪師に就いて佛國土へ參る修行を怠らなかつた。

人境俱に奪ひ取つて了ふ場合は禪者尋常の茶飯事である。禪は恰も吹毛の劍の如く、非常に銳利なもので、如何なるものと雖も障つたら直ちに一刀兩斷、豈啻に迷情愚痴の一事のみではない、特に智者學者、お悟り自慢の鼻先杯、聊かの遠慮會釋もなく、どん／＼截つて了ふ銳鋒であるとお心得て、さてこの吹毛の劍は誰が手に握つて居るのか、先方をのみ眺めて居つたなら、何時になつても澄潭の月を踏破して碧落の天を穿開する時節はなからう。

神尾將軍の參禪振

青島攻圍軍の總司令官として赫々の武勳英名を世界に馳せた神尾光臣氏、今東京衛戍總督陸軍大將正三位勳一等功一級男爵として世に時めく時、半夜人靜まりて思ひを昔に回らせば、日清の役以來部下の勇將猛卒を殺せし事數知らず、所謂一將功成りて

萬骨枯るの嘆を痛切に感ぜずには居られない。

有時も也得たり、無事も也た得たり、無事に處する武人の覺悟と國に殉せし將卒の冥福を祈るべく、折柄八面の清風衣衾を惹く鎌倉山の古刹、圓覺寺指して參禪修行を志した。

鷓鴣啼いて深花裏に在りとも謂ふべき圓覺寺の境地は新に迎へられたる管長釋宗演禪師指導の下に古川惠訓和尚の師家で、大正五年七月夏末、大接心會が行はれた。夫に參じた將軍は五十有餘の雲兄水弟と相伍して味噌汁や茄子、南瓜の山料理に麥飯粥、日夜結跏趺坐して心膽を練り、默想に耽り、或は心ゆくばかりに亡き部下の冥福を祈つて居るのだ。今其禪堂生活の一面を傳へんに、將軍は本堂の奥の裏書院、八疊と六疊の無裝飾の二室を借りて八疊の方に起臥し六疊の方に荷物を置いた。朝は必ず四時の振鈴を聞いて靜かに離床し、六疊の方の庭に出て幽寂無碍の積翠を仰ぎつゝ、木い芭蕉の葉隠れに、冷水ですつかり身體を清め、それから寢床の始末から部屋掃除

除まで、六十二歳の將軍は、恰も自己が千年の棲家の様に何も彼も獨りとする。朝飯は他の雲水と同じく粥に萬年漬と稱する大根の古葉漬、それが濟ひと兀々坐定三昧。時には日陰の涼しい椽先に出て碧巖集や無門關を繙くこともある、雲凝つて峰巒畫くが如き眞夏の日中、靜かに後庭傳ひに老師を叩いては見解を呈する、雨降る夕などは骨の高い番傘に薩摩下駄を穿いて悠々歩を運ぶ將軍の後姿は如何にも床しい。斯く一切の客を謝して徹心瞑目の三昧境を迎る將軍の參禪の動機や如何、一日記者に語つて曰く

「今から二十餘年前、私がまだ大尉時代今の禪師の師に洪川和尚と云ふ大善知識があつた。其和尚に參じて初めてこの圓覺寺で參禪したが、爾來兎角田舎廻りをして居て思ふに任せなかつた。此度機を得て來て見れば寺門も庭樹も昔のまゝだが、先師既になく予もまた鬢髯に霜を置く、草木も靈あらば僕の變つたに驚いて居るであらう。史を案ずるに昔の英傑は一人として信仰のないものはない。當寺の開基たる

相模太郎が元軍十萬を屠つた一喝が何處から出て居るか、此寺の開山佛光國師から

「莫妄想」の三字を得たのに因由するではないか。」

膽斗の如き相模太郎を彷彿せしむる將軍の語氣は謂はずして自己の信仰を物語るもの
てはあるまいか。更に語を繼いで

「今は西洋の文物が輸入されて精神界が著しく空虚になり、人物が薄つべらて、技
術が巧妙に出来ても大經倫大手腕ある人傑がない。口では豪語するが、突如脚下か
ら大砲が響く、白刃が閃めくと、それでも平然自若たるものが幾人あらうか、精神
の修養これが第一である、禪機の活作用、これ精神修養の根本義であらう。願くは
僧侶も覺醒して眞禪味を世に弘通さして欲し。」

天下人の舌頭を截断するの一句、道ひ得て頗る親しきものがあるではないか。檻前山
深くして水清きところ鋸地獅子の如き老將軍の活面目が躍如として居る。

蚊一つだに施しかねる我身かな 古人

妻女を離別せし今北洪川

前章に述べし神尾將軍が參禪の師たるのみならず、禪門近時の大徳として有名なる
今北洪川和尚、恰も明鏡の臺に當り、明珠の掌に在るが如く、胡來れば胡現じ、漢
來れば漢現するの活作略も、等閑の修行を以て自得せしものに非ざることを思はねば
ならぬ。

和尚は大阪福島の、幼名は新三郎と云ひ十三にして父忠久に従ひ、藤原東畝先生
の門に參じた。時に先生は試みに白文の徂徠集を讀ましめたるに、少しも滯ほる所な
くスラ／＼と讀み終つたので先生は舌を捲いて驚歎せられたと云ふことである。又詩
文は廣瀬旭莊に學び、刻苦精勵、數年にして學大いに進み、十八歳の時附近の中島と
云ふ處に一の塾を開き學生の爲に書を講ぜられた。一日自ら謂へらく「神儒佛の三教
は、各々其道は異なるも歸するところは皆同一にして、共に聖域に達するに在り、然る

に儒士等の多くは頻りに句を求め章を尋ね、徒らに古人の糟粕を嘗て得々たり、是れ豈に孔子の眞意ならんや」と爾來一種の煩悶に陥り悶々として樂まず、日々不愉快に打過ぎたるに、一日書を講じて、孟子浩然の氣の一節に到るや、忽ち大聲叱呼して曰く「孟軻は浩然の氣を説き、我は浩然の氣を行はず」と乃ち門人を謝し塾を閉鎖して専ら靜坐黙想を事とし、頻りに文字以外の活工夫を求めて止まざりしに、偶々「禪門實訓」を読み、教外別傳不立文字、直指人心見性成佛の語を見るや、覺えず手を拍つて「是なる哉」と叫び、遂に發心して斷然身を禪門に投ずるの決心を起された。

然るに父忠久は禪師の頻りに冥想に耽り、沈思默考して止まざるを見て、態と師の爲に美人淺子を嫁女に迎へ、心機を一轉せしめんと計りしも其志は依然たり。只一時之に従ひしのみにて初一念は終に離さなかつた、其間に一男を擧げたが、廿五歳の時、京都相國寺無爲大抽の機鋒峻烈、手段亦惡辣、人呼んで鬼大抽と稱すと云ふのを聞き、歸心矢の如く、斷然出家の志を定め、妻淺子には

「我と汝とは尙ほ絲を以て土人形を繋ぐが如し、今絲切れて我は山に入る、穢土厭離狀仍て如件」

と記せる一書を貼し、瓢然として大抽の門に馳せ參じ、落髮して名を宗溫と賜はつた。大抽尙和は心潜に此法器を得たるを喜びしも、表面は飽迄毒手を逞しうし、師を見る毎に頑拳棒喝を下し、恰も怨敵の如くに取扱はれた。時に荻野獨園等も亦た同じく大抽門下に在つて參禪して居られたが、洪川和尙の苦行を見て厚く同情を表し、半途にして廢せんことを憂ひ、能く之を慰めたと云ふことである。

時に師は獨園に謝して云はるゝやう「我已に父母妻子に背き三經五典を擲ち、奮つて光明の門に投ずる所以のものは見性の大事を遂げんとするにあり。故に一毫の得る所なくして、鬼和尙の痛棒下に斃るゝとも、固より寸分の憾なし、師兄また意を勞すること勿れ」と、斯くして益々工夫練磨の功を積み、參究怠らず修業を續くること二ヶ年、一日師は選佛場に坐し、忽然として前後際斷し、心理玲瓏にして、恰も死後に

再び蘇りたるが如く、従前の疑團一時に氷解し、手の舞ひ足の踏む處を知らず、大唱して「我れ神悟せりく、百萬經典日下燭」と叫び、直ちに奔つて拙和尚の室に入り點檢を乞ひしに、和尚は洪川の手を執り、潜然たる涙を拂つて云はるゝには「老衲汝が發心の凡ならざるを知り、特に惡辣なる手段を用ひたりしが、汝剛信不退、遂に此妙悟を得たり」と師も亦喜び極まつて泣いて止まず。

疎濶孔子 相遇阿堵中 憑誰多謝志 好謀主人公

の一偈を打して以て和尚に呈した。後轉じて備前の曹源寺儀山和尚の下に到つて證上の修を成じ、三十八歳にして岩國侯の招聘に應じて永興寺に住し「禪海一瀾」を著し以て參禪者に示された。

明治八年教部省に召され、後圓覺寺に昇住し大いに禪風を擧揚せられたる事は人の知るところである、其法嗣には現圓覺管長釋宗演、前圓覺管長宮路宗海の兩師を初めと

して在俗の居士大姉は枚擧に遑なき位。明治二十六年一月十六日、八十六歳の高齡を以て遷化せられた。往より禪門偉傑と稱せらるゝ人々の發心の尋常ならざるは一様なるも、師の如き不退轉の信念と門風の盛なるは蓋し近代に稀なりと謂はねばならぬ。

心越禪師の膽力

心越禪師名は興備、東阜と號し、明の杭州金華府婺郡浦陽の人、八歳にして出家、三十歳の時、阜亭山翠微澗堂に謁し、三年の後其喝下に證悟した。時に明が亡んで清が起つた。師遠遊の志を起したが、恰も好し、明僧澄一が我が長崎の興福寺に在つて師を招いだ。師は直ちに一杖一笠長崎に着いたのは延寶五年である。翌年水戸光圀公の臣今井弘齋が來り調して招聘の意を述べたが、師はなかく應じなかつた。同八年京坂地方を遊化し、諸山の長老參叩して道價益々隆んであつた。それを黃檗の僧侶が嫉んで百方妨害を試みたので、師は止むを得ず長崎に還つた。奸僧等は尙嫌らずして

師を譏誣し、遂に一室に幽閉したのである。けれども迷悟の境を超越したる師は晏如として自若、戯に記して曰く、

若日世尊掩室於摩竭、維摩杜口於毘那、今日山衲閉關却是爲何、正是丈夫別有通霄路、不向他人行處行、如何是不向他人行處行、恭承鎮主命、今朝且閉關。

と、悠々たる生涯欽すべきではないか。天和元年七月、水戸義公其厄を感み、論奏して冤を釋き、江戸小石川の邸に請じた。義公は一度師の力量を試みんと思ひ、儒臣と計つて、或日宴を設けて師を其席に招いだ。さて義公は親ら盃を師にさくれたので、お小姓は銚子を執つて酒を注ぎつゝある瞬間、忽ち牀の下より轟然と一發の砲聲が響いた。お小姓は喫驚して銚子を投げ出し、並居る人々は轉倒せんばかりの大騒ぎを演じたが、師は一向平氣で、

「銃聲は武門の慣、御斟酌には及ばぬ」

と、徐に盃を乾て義公に返し、小姓又銚子を取りて酌をせんとするを見たる師は、俄かに大喝一聲「喝!!」とやつた。義公は色を失ひ盃を落した。師曰く

「棒喝は禪家の常、御斟酌は致さぬ」

と、爾來義公は大いに禪師に心服して、其坐下に參じ、元祿五年師を請じて祇園寺を開堂して、永く心要を叩かれた。

三度勅使を固辭せる木禪庵

七堂伽藍輪奐の美を極むと雖も、惜むらくは好箇の佛殿本尊なし。徒らに權門に阿り信徒の木履を揃へる事のみを知つて、真箇の大法地を拂はんとする末法の今日、想起す、晩唐の先徳木禪庵の行履を叙して自他の策勵に資するも、又禪者の一分ではあるまいか。

支那四百餘州に聞えたる禪師、大瀉の會下に火頭の役を勤めて居る一人の青年僧が

居つた。三度の食事は飽満に至らず、夜毎の寝も温暖を求めず、清苦練行、履操群を抜いて居るに拘らず、多くの雲兄水弟が朝三暮四公案を拈じ、話頭を闘はし、丈室に參じて所解を呈するのを白眼に眺めて、未だ曾つて一句の法を問うた事がない、蜀の梓州鹽亭の貴族に生れた、長慶と云ふ者である。一日師家の大瀧禪師、長慶に向つて曰く「汝我會下^{わが}に在る事數年、未だ一話を舉せず、其意如何」答へて曰く「何を問うべきか」瀧師笑つて曰く「如何なるか是れ佛とて問へ」と、語未だ畢らざるに長慶は手を以て師の口を掩ふ真似をした。豫て火頭の一僧の尋常一様の器ならざるを看取して居た大瀧は益々歎賞して「汝は真に禪者の骨髓を得たるもの也」と云つた。是より其名四方に喧傳さるゝに至つた。如何なるか是れ佛と聞いて其口を掩はんとする此間の消息は、今茲に述べべき限りでない、須らく實參實究して初めて會得すべきである。長慶後に天彭の壩口山上、澗水潺湲として喬樹鬱蒼たる仙境の、その中に特に靈秀せる周圍四丈餘の大木、自ら雨露を凌ぐに足るを見て、茲に居を卜して大隨と號

した、木禪庵とはその別號である。獨居十年、影一度も山を出でざるに來り訪ふもの數を知らず、蜀王其名を慕ひ三度召せども應ぜず、更に内侍をして「神照大師」の號と勅額を下賜したが、長慶の辭意は牢として動かすべからざるものであつた、王止むなく四度目の使者に旨を含め、且つ「汝よく此使を果さずんば汝を誅せん」と嚴命を下したので、使者は長慶に其由を訴へて初めて王の目的を達した。

斯る事柄は獨り長慶和尚のみの行履ではない。我國に於ては道元禪師を初め其他に多くの例もある。然るに現代の僧侶にはこの意氣がない、この權識がない、この道念がない。漫りに伽藍佛法の徳川時代を夢みて王侯貴人に接近し、一官吏の鼻息を窺つて自己の慾望を遂げんとする者のみである。理智に没頭し、節目に拘泥し、名利の境に彷徨する迷妄の漢のみ多き現代に、和尚の道業の一端を披瀝するも、又一服の清涼濟てあらう。

眞個の師家松蔭和尚

禪僧一人が生活する爲めには、俗人五人前の残り物が必要であるとは古より言ひ古たる斯界の言葉である。けれども今の世には斯る言葉は通用しない。京五山の随一たる南禪寺は近年檜普請で勿體ない位の伽藍が落成した、其他諸山の結構造作孰れも宏壯なものである、随つて師家の居室は實に富豪の別荘を見るが如く、各々華麗を競うて居る。一椀の粥と雖も悉くこれ佛種ではないか、贅澤の味が分つては禪家の生命も最早や末後だ。

斯る時代、洛北紫野大徳寺に隠れたる眞個禪門の老師家松蔭和尚のあることを紹介するの光榮を有する者である。予、不幸にして未だ和尚の警咳には接せざるも、和尚が一度大徳寺の僧堂を預るやうになつてからは五山の雲水翁然としてその傘下に集まり、目今の所ては關西に於ける雲水持の師家番附表が出来たら、和尚は先づ横

綱である、一時は建仁に向ふ敵はない位であつたが、今は大徳が第一位だと聞いた丈でも和尚の道力の尋常一様に非ざる事を窺ふ事が出来る。

和尚は學問に於ては第二流否第三流である。けれども躬行實踐以て雲水を心から感服せしめて居る點は、到底他の師家の比ではない。和尚は早起の名人で曾つて大徳に入る前に伏見宮の辨天に居つたが、毎朝三時頃に起て朝の勤行を済ませる、其附近の人々は「今度の和尚さんは朝寢と見えて、朝の勤行は一度もしない」と噂した位に早起である。

大徳寺に師家となつては六十名の雲衲を接待しながら、大小の便所は毎朝必ず自分で洒掃する。雲水もこればかりは相濟まぬと云うて早起して和尚に先んじようと思つても、何時も和尚に先んぜられる。又和尚は師家特有の御馳走料理を一切やらすに、雲水と同じ食物で満足して居る。侍者などが他から貰つたと云つて時々雲水とは一寸變つた料理を呈上する事もあるが、後に夫が知れると大變叱り飛ばすので、昨今は全

く雲水をつくりの食事をすゝめてゐるとの事である。日常外出にも車に乗るが嫌ひ、贅澤が嫌ひ、おしやべり禪が嫌ひ、磊落振が嫌ひ、而して實參實究を好む、真に當代に得難き老師家ではないか。

目下洋行中の前田侯の如きは和尚を慕ふこと父の如く、東京から毎年春秋二季には入浴して和尚の指導を受けて居たとの事である。近時禪門の師家数ある中にも、獨り松蔭和尚のこの行持ありて、恰も亭々として高峰の巔にあるが如く、以て萬人の仰ぐところ、真に得難く、又有難き老師家ではあるまいか。

鳥尾得庵伊藤公を一喝す

禪は元來行解相應を尊ぶ、等閑の一句一言一棒一喝は素より三文の價値もない。或る夏の夜半、滄浪閣上に於て春畝伊藤公は鳥尾得庵を請じて碁を圍んだ。稍時刻も移つた頃、俄かに庭の隅の方が明るくなつた。これは春畝の命令で、庭園の各所に篝火

を焚き、座敷に飛込む數多の小蟲を焼き殺す爲めであつた。得庵それと覺るより忽ち顔色を變じ「ニア、面白くもない」とばかり手にせる碁石を其處に叩き付け「乃公はもう歸る」と起ち上つた。春畝は事の意外に驚き、得庵を引留めて「又貴様の例の疝癩か、何が癩に觸つたのだ」と云ふと、得庵は益々怒つて「これで疝癩を起さぬやうな奴なら阿呆ぢや、譯が聞きたくば聞かせてやらう、一體貴公と乃公とが、一夕の娛樂の爲めに、篝火を焚いて無量無數の蟲まで焼殺すとは何事だ、又下僕等も就眠さすべき時間なるに、皆起きて働いて居る様子ぢやが、之れ程の無慈悲殘忍な事はあるまい、位人臣を極めたら、少しは注意しろ」と大喝し去つたと云ふ。得庵居士二十餘年の修禪は將にこの一喝に盡きて居る、後進の參禪者はよろしく得庵居士の心事を鑑とすべきである。

あつしとも言はれざりけり涕返る

水田に立てる賤をおもへば 明治天皇

鳥尾得庵伊藤公を一喝す

楠公決死の前日

誠忠凝つて赤心の迷るところ、或時は金剛王寶劔の如く、又或時は踞地の獅子の如く、擊石火裡に味方を勵まし、閃電光中に敵を惱ませる楠公一代の生涯は青史の詳記する所、特に頼山陽の「日本外史」は出色の大文字として此間の消息を傳へて居る。足利の兵五十萬の大敵を引受けて湊川に出陣せる楠公は手兵僅かに七百名、素より生還を期せぬ決死の覺悟。けれども生死の二念に於ては未だ徹底せる透脱の見解はなかつた。今の湊川神社の後方十餘町の山手にある廣嚴寺に明極楚俊禪師を訪ひ胸中消息を通じた、禪師は支那の歸化僧であつて、其本籍は慶言昌國黃氏の子である、大法宣布のため我國に渡來後京都建仁寺に滯錫されしが、後醍醐天皇の即位第十一年に勅願に依つて廣嚴寺を建立し開山第一世に任命されたのである。されば楠公決死の前日に禪師を訪うて必要を叩かれたのは當然の事である、今「護法賢聖傳」「史料通信叢

誌」大日本史料等に傳へられたる商量を概説せんに、正成禪師に見えて問て曰く「生死交謝の時如何」禪師答へて曰く「兩頭俱に截斷すれば一劍天に倚つて寒し」正成曰く「落處作麼生」禪師威を振つて一喝、正成起立三拜して通身汗流る、禪師曰く「爾徹せり」正成曰く「若し來つて和尚に見えずんば曷ぞ向上の關候を超出することを得ん、今より世々針芥を失はず」と、時に禪師更に問うて曰く「爾の問酬舊參に下らず、平居却て幾個の宗匠に見え來るや」正成答へて曰く「某甲小より誠を禪門に傾け、願を宗乘に探る、一日南都に赴き、路片岡を過て一禪僧に逢ひ頗る疑ふ所を質す、某甲進んで問うて曰く「猶密旨有るべきや」僧曰く「公の名は如何」某甲答へて「多聞兵衛正成」と呼ぶ、某甲應諾す、僧曰く「這裡是れ什麼の所在ぞ」某甲是に於て豁然として悟る、此より後常に此僧に請ひ數々慈誨を蒙る、或時某甲問うて曰く「道を以て軍に勝は如何」僧曰く「至善を以て兵と爲せ」と、某甲服膺して忘れず、此僧故郷に歸り幾くならずして入寂す、某甲道を問ふ僅かに八箇月、只恨む勝緣淺薄なるを、然

りと雖も、此道を會してより以來、兵を用ふる自在、機に對する無碍なり」と語り畢つた。禪師曰く「善哉、多年作家の爐竈に入らずんば焉ぞ今日の事あらん」正成瑠璃殿の内に入りて醫王を拜して、香火の縁を結んで出づ、禪師門送す云々、正成は明極禪師を訪うて如上の商量をせられたのは建武三年五月二十四日の事である。翌日湊川に於ける楠公の活作略は蓋し心境俱に忘れて打成一片の處、身は十一個所の創を負ふと雖も既に佛心印を傳へて生死岸頭游戲自在、廣嚴寺の門内無爲庵に引揚げて、郎黨七十三名と共に欣然として刃に伏した。

志閑禪師と末山尼

昔支那に於て灌溪の志閑禪師と云ふは、臨濟の門下で在つた。當時有名なる高安大愚禪師の神足に末山尼と云ふ尼僧が居つて、縦横の機略は尼僧ながらも天下に名を轟かして居るを片腹痛き事と思つた志閑禪師恰も高々たる峯頂に金鞭を握れる衝天の志

氣を以て、末山の脚下を點檢せんと一日彼を其庵に訪うた。末山は志閑の顔を見るより早く

「近離甚れの所ぞ」と言はれた、志閑曰く

「路江」左様本日は路江から参りました、末山は直ちに路江と云ふ辭を捉へて

「何ぞ蓋却了來せざる」路江などは正直過ぎた坊さんぢや、何故口を蓋うて一切の得失是非、言端語端を離れて一拶を下したならよからうと、優しさ中にも乾坤吞却底の機鋒、流石は志閑禪師早くも末山の大器を看取し、敬意を表し言葉を改めて問はれた「如何なるか是れ末山」久しく末山と響く、其山の高さ幾干と謂はんばかり、末山間髪を容れず「不露頂」と答へた。一萬二千尺の富士に非ずヒマラヤに非ず、高低超脱末だ嘗て頂を露さず、故に見んと要せば白雲萬里、眼見耳聞の遠く及ばざる端的、向上向下の差別を離れ、佛邊祖邊の熱氣熱慢なく、世間出世間の臭味を脱せる本來の面目であるとの意氣である。

志閑禪師更に問うて曰く「如何なるか是れ末山の主」一體左様なる山に住居せらるる末山の主人公は如何なる人物であるか、男相か女相か、佛面か、祖面か、迷相か悟相かとの問ひである。末山尼答へて曰く「男女の相に非ず」佛面祖面も用不着、一切の名相を遠離した、正に無相の相であるとの答へ、尼僧ながらも眞向より下せる大上段、志閑禪師「何ぞ變じ去らざる」男女の相にあらずとは餘りに向上底の一着、或時は男相ともなり、或時は女相ともなる、轉變自在に變じ去つたら如何のものであるかとの問話、然るに末山尼曰く「神に非ず、鬼に非ず、此の何をか變ぜん」變じ去るとは畢竟閑妄想、神に非ず鬼に非ず、怪物に非ず、變不變の閑工夫は用不着、と飽迄も高く止まつて動かない。

志閑禪師初めて大に所得あり、後日住山上堂の時

「我れ臨濟爺々の所に在て半杓を得、末山嬢々の所に在て半杓を得、共に一杓と爲して喫し終れり」

とまで讃歎された。末山の不露頂、踏まんと要せば天地懸隔、半杓底の端的言詮を下せば第二第三、學者此間の消息を參究して初めて得べきである。

新井石禪師得度の因縁

凡そ出家は、家を捨て、両親を捨て、更に我身を捨て、こそ初めて出家得度の意義がある。由來佛道修業は漸く入れれば漸く深く、茲ぞ修業の堂奥とすべき所はない。向上更に向上するも回向遍照して證上の修を打し、自覺々他覺行圓滿を以て僧侶の本分とする。されば、等閑に僧侶にでもならんと云ふが如きは、甚しき心得違の事である。茲に洞門一流の師家として僧俗共に其徳望を慕はざるなく、或は言説に或は筆硯に、身を接化度生に捧げて、南船北馬、曾て席の温る違なく、教界の開拓に貢献しつつあるは新井石禪師であらう。

師は福島縣伊達郡梁川町に生れた。幼にして静寂を喜び、其菩提所なる興福寺の淨

境は何時も幼き師の遊び場所であつた。そは幼時の師は身體あまりに強健ならず、特に恐怖病の爲に身心を疲勞すること多く、慈愛溢るゝ母君は、愛しき我子の病氣を本復せしめんが爲めに、醫療藥療は云ふも更なり、所有苦心の治療も更に其効なく、術策盡きて、日頃信奉する觀世音の慈悲を仰がんと、決然として月六回の茶斷ち鹽斷ちの大願を起した。

觀音大士の不可思議なる功德力により、師の病氣は拭ふが如く全快するに至つた。之れ聽て寺院の淨境を喜ぶ因縁となつた事であらう。然るに母君豫ての誓願にて、本復の上は師をして東京淺草觀世音に御禮參りをせしむる考であつたので、師漸く十歳の秋、偶々東京市に於て曹洞宗門の議會開會せられ、前に述べた興福寺方丈、新井如禪師の上京を機とし、母君は此際觀世音に參拜せしめ、豫ての誓願を果さんと、愛兒を如禪師に托して我家を送り出した。

芝區愛宕山麓青松寺大書院に於て開會されたる曹洞宗第一議會は洞門の耆宿を網羅

して大盛觀を極めた。之を傍聽せし幼き師の胸中の琴線には何ものかの響があつた。他日教壇に立つべき根底は此時に於て兆された、いとも無邪氣に可愛らしき菩提心は發せられたのである。

一度發せし菩提心、幼な心の切なる思ひを如禪師に語つた。而して矢も楯も堪らず、直ちに剃髮を乞うたのである、如禪師も素是れ一世の老知識、直ちに快諾して、前髪姿の稚兒、見るからに愛らしき師の頭には剃刀が閃めいた。「流轉三界……不能斷」青松寺長屋より漏れ来る剃髮の口語は蓋し空前絶後であらう。

剃り落されたる毛髮は直ちに淺草なる觀世音に捧げられ、議會終了と共にくりく坊主の一沙彌は間もなく福島縣梁川の郷に現れた。

燒野の雉子、夜半の鶴、子を思ふ親の心に變りはないが、わけても一人の幼兒を山川百里、異郷の空に旅立たせたる母の心情、風吹く夜半の妻折戸、小雨をば降る秋庭の朝、我兒の歸りを待ち詫び居りし矢先、突然姿變りし一沙彌が師の法衣に抱かれて、

欣々然と歸り來らんとは、父の驚き、母の胸中、そも如何ばかりであつたらう。如何に不動の信念に住したりとは云へ、絶ち難きは親子の縁、連る愛情の絆を咄嗟の間に、斯くも變り果てし愛し兒の姿、兩親はその手を握つて言葉すら出なかつた。其後如禪師は幾度となく交渉を重ね、相談に相談を経て、漸く兩親をして納得せしめ、茲に師は改めて興福寺に入り、芽出度出家得度の式を擧ぐるに至つた。時に師年齢僅かに十二歳。

一塵一芥も皆是佛種

兎角禪僧と云へば、「釋迦彌勒も是れ兒孫」杯と大言壯語、隨つて日常の行持も一些事に頓着せざるが如く解する者あるは遺憾の至りである。「一粒米の重きこと須彌山の如し、七十二功豈に等閑ならんや」この佛意を體して、一紙一塵と雖も塵末に取扱はぬのは眞の禪者である。

往昔、一僧あり師を求めんとして叡山の一寺に大徳を訪ねんと山路へかゝつた。だん／＼行くと一の谷川がある、この谷川の上流が大徳の寺と聞き、喜び勇んで道を急ぐ途端、フト見ると川上から一莖の菜の葉が流れて來た。僧これを見て思へらく、一塵一芥悉く佛物である、然るにこの菜は定めし信者の供養にかゝるものならんが、これを漫りに流すと云ふは定めし行解相應の大徳ではあるまい、何ぞ遙々訪ねて斯る無道心ものを師と仰がんやと、大に落膽して元來た途を戻らんとした。折しも上の方より走り來つた一僧がある「何事で御座る」と問へば「今誤つて一本の菜の葉を流したれば、それを拾ひに行くのである」と答へる。これを聞いた件の僧は「貴僧は如何なる方なりや」と尋ねると「この山奥に住する大徳の弟子である」との答へに、僧は再び山に登り、大徳の會下に參じて修行したとの事である。

こは一場の昔語り、これを今人の行履に徴すれば、豪放無二なる南天棒中原鄧州和尚は平素信者から貰ふ進物の包紙は丁寧に皺伸しをして書信の用箋又は手習用にせら

れる。先年遷化せられた禪門近代の大徳森田悟由禪師の如きも新聞雑誌の小さな包紙すら其儘には捨てられなかつた、即ち日本紙は自ら鋏を入れて小撚にし、洋紙は剪つて一枚として、同じく習字用に供せられたものである。

他の信施を魚末にするは佛意に背く、この故に彼の伊深の泰龍和尚の如きは中秋の一日、會下の大衆が大根作務を監督しつゝ、一雲衲が大根の枯葉を二三枚切り棄てたのを見て、嚴然として下山を申付けた。いくら謝罪しても赦さない。役寮一同協議の結果「あれは平素より人並勝れた綿密の僧であれば、爾後は必ず斯様な不注意は致しませぬ、是非お許しを……」と云つて願ひ出たが「一度佛意に背きしものは我會下には置く事ならず」と、遂に下山を命じたと云ふ事である。

敢て大根の枯葉一枚が問題である譯ではない、吾人は深く和尚の意のあるところを考へ、以て自ら深く省るところがなくてはならぬのである。

いぶくともあとはねやすき故道かな 不入人

居士渡邊無邊の熊の皮

麻布本村町に子爵の邸を訪ふ者は、先づ其宏壯雄大なる庭園の風致に驚くであらう、晝尙ほ暗き鬱蒼たる老杉古松の間を敷詰めたる自然石、重々苔なせる細徑を幾段か下り行く時には、一步は一步より俗塵を遠ざかりゆくかの心地、何となく娑婆氣離れをした、深山幽澤の間を辿るが如き感が湧く、若し夫れ一度脚下を望めば深潭水を湛えて碧玲瓏たること紺紗の如く、奇岩凸出するところ幽に水鳥の羽音が響く。

此池の汀を通りて、園内に相應しい一棟の建物は實に子爵の書齋である、惜しむべし近來一洋館を建築して、折角の風致を俗化したかの感がある。

氏は人の知る如く、前宮内大臣伯爵渡邊千秋氏の令弟、信州舊高島の藩士で弘化三年五月の生れてある、年二十三初めて東京に出て英語の習練に心掛たのは、従來の書劍のみを以て、文明の大局に處するは爲政者の要素を欠くものなりとし、大に實力

の修養に志す間もなく福岡縣令に拔擢せられ、二十二年大藏次官に陞進し、翌年帝國議會の開説には政府委員として明晰痛快の言論に花咲かせ、二十五年松方内閣倒るるや、伊藤公に擧げられて大藏大臣となつた。其後遞信大臣に轉じたが間もなく辭して野に下り、爾來心を修養に傾け、參禪辨道、自ら無邊、俠禪、又は機外劍客と號し、大磯の別荘に堅く禪扉を鎖して再び世に出てず。手は一日麻布の本邸を訪問し刺を通じて參禪の動機並に其感想を叩いた。無雜作に半ば開かれたる和漢の古書幾十冊を側に積み、大きな熊の皮にドツカと大胡坐、小さな一貫張の机に韻礎のやうな本が載つて居る。今しも出來たばかりと思はるゝ墨痕淋漓たる氏一流の額面が二三枚隅の方に乾してあつた。「なんでも靜に實力を養ふのが、修養の目的ぢや」と何を聞いても「ウム／＼」とばかり容易に口を開かぬ。何だか偉さうてはあるが、折角來たのに困つた老漢！とは思つたものゝ致し方がない。「うづれ又改めて……」と逃口上に早速退却した。

將に夕靄に閉されんとする深潭、色藍よりも綠に、進まず退かず、悠々として鷺鳥が二三浮て居る。今でも無邊居士を憶念する時、思ひ出さるゝのは、あの大きな熊の皮のみである。

中
篇
二
般
土

白隠會下の俊才

日月星辰一時に黒く、教界混沌として大人傑なし、假令棒喝の形式あるも禪門の宗師家多くは自救不了なるを如何にせむ、と長嘆息を漏らす人は所々方々にある、けれども、これは今に初まつた事ではない、眞の獅子兒は左様に無造作に出來上る譯のもてはないのだ。

されば、五祖法演禪師も嘗つて白雲に居られた時、靈源和尚に答へられた書の中に、今夏各所より米麥を收めざれども憂と爲すこと勿れ。夫れ憂ふべきは一堂數百の納子、一夏に一人の箇の狗子無佛性の義を透得するものなく、佛法の將さに滅せんとするを恐るゝのみ。

と云はれてある。虎兒を擒へ龍蛇を辨ずる事は素是れ宗師家の本分底なりとは謂へ、天關を掀げ地軸を翻す眞の作家は、何時の時代も容易に現出せぬのである。

現今我國に於ける濟下の宗風は多くは白隱會下の末流であるが、白隱禪師は自ら五百年以來の知識だと云はれた程あつて、實に其識見器宇非凡な英傑であつたには相違ない。されば其會下には四十餘人の俊才が現はれた、中にも東嶺、遼翁の二師は其上足として尤も拔群の卓見を具して居た。この二師よりも勝れたる透關底の眼、旗を擡き鼓を奪ふ神通妙用の手腕ありと稱せられたるは三河の良哉であつた。

良哉初めてその門を叩くや否や、禪師は一見して「文殊來哉」と叫んで稱嘆措かず、間もなく彼に印可を與へた。然るに後日に到り、白隱禪師人に語つて曰く「今三年間良哉に印可を與へなかつたならば、我が會下四十餘人中の隨一になつたであらうに、實に惜しい事をした」と述懐せられた。良材も良師の彫琢を経ざれば眞の價値は顯れぬ、その良師にも亦手加減の誤りがなくとも限らぬ、俊傑良哉の如きも印可の早かつたばかりで、終に第二三流に止まつて了つた。

東嶺、遼翁の二師中、遼翁は如何にも禪機潑灑なる活達の氣質高々たる峰頂に立つ

て第一義を擧揚する底の大機であつたが、その法嗣は春叢和尚を以て斷絶して了つた。然るに東嶺和尚は恰も深々たる海底を行くが如く、綿密を旨とせる宗風、黙々として一歩々々向上の一路を辿る底の那人であつた。而も蒲柳の質、中年にして早くも死を覺悟して「無盡燈論」を脱稿されたが、幸にして古稀以上の長壽を保ち、その天稟の學識は益々精彩を加へ、白隱の未だ説いて盡さざる玄妙の幽意を闡顯發揮して禪門の光彩を添ゆること幾段、更に法の爲めには抛身捨命も厭はなかつた、その行願の眼目として、如來四弘誓願に加ふるに普賢の十大願を以てし、常に普賢三昧を行じて居られたのである。法嗣には峨山和尚あり、峨山下には頭腦緻密なる卓州と毫放不羈なる隱山との二俊才が現れた。恰も洞門に於ける瑩山下の五哲の如く、聽て此二師の會下より幾多の人傑輩出して今日の濟家に至つたのである。

とやせまじかくやせまじと思ひつゝ
 ことしもけふを限りとぞなる 淨庵禪師

東溈和尚陰徳の行持

情を超え見を離れ、縛を去り粘を解き、向上の宗風を提起して八面玲瓏なれば、必ずや十方齊しく之に應ずるに至るのである。筑前博多の聖福寺に居らるゝ龍淵東溈老師は將に古稀に近き宿老であるが、荻野獨園和尚の法を嗣いで、夙に陰徳の聞えも高く近時稀なる老師家なるに拘はらず、其風采が如何にも揚らない。爲めに飛んでもない者と間違はれる事がある。

日清役の頃、妙心寺に於て花園法皇の六百大遠諱の法要に因み大授戒會が昌んに勤まつた、折しも東溈和尚は數十名の居士大姉を引率して上洛した。何分豫想意外の集來者に山内はそれ程の設備が整つてない、特に便所が不足なので、男女の戒徒は庭先へ出懸けては松の根に走り用を便じて居る、之を見た東溈和尚何にも云はずに自身(東司(便所)より肥桶を荷ひ來りて其處に持つて來た。一杯溜らぬ内に始末しては亦た

其處にちやんと据えて置いた。何分風采の甚だ貧弱な和尚の事として、誰一人格別注意を拂ふ者もなく田舎の乞食坊主位に思つて居たものであらう。

所が愈々戒徒へ血脈を授けると云ふ日になつた。當日の戒師即ち妙心管長無學禪師が多く集まつた其中から、特に東溈和尚を選抜して授戒の證明師に登用した、昨日迄は糞尿の世話をして居た破衣の一老僧、今日は忽ち紫衣の老宿として四衆に臨まれたのである。誰か逆順縦横なる和尚の活手腕に驚かぬ者があらう。

又和尚は曾つて毎夜僧堂の大家が寝すんだ頃を考へて、靜に起き上つては襦袢一枚になり、廣い境内を掃除せられた事があつた。雨天を除くの外は殆んど毎夜の如く作務三昧、けれども坐下の瞎漢は誰一人として之を知るものはなかつた。偶々或夜の事一密行巡査が境内に來て見るとこの有様、あまりの不思議さに曲者と思ひ誤りけん誰かすると、豈圖らんや、平素心膽練磨を志して以來は日々わが參禪の師と仰ぎつゝある老師であつたので巡査は二度吃驚！時に老師は徐ろに「オ、お前は立花か、真夜

中に御苦勞な事ぢや、衲か衲は自分の修行にやつて居る分の事ぢやが、此の事を他の者に云うてはならぬぞ！」畏りましたとは云ふもの、立花巡査は暫く足を止めて、老師の大切なる法體は輕忽にならずに、爾後護法扶宗のため必ず御自愛せられんとを涙と共に懇願した。爾來和尚のこの夜作務は止められたとの事である。

「法の爲めにして身の爲にせず」とは古聖の誠め、和尚の凛々たる全威は病魔も窺ふに間隙なきは勿論である、けれども坐下の居士の親言を無にしない所に眞の宗師家たる面目が露堂々として居るではないか。庭掃除位は庭男もあり其會下には多くの雲兄弟が居る、何ぞ自身を勞する必要あらんや坏と、近時の理窟屋は思ふも知れぬが、これが抑も宗教の有難い所、世間の俗情を以て思議せられぬ妙味である。「他は是れ我に非ず」とは道元禪師が支那留學中に得たる一老典座の至言である、數十名の奉公人を使用する主人公にして深夜窃に便所掃除を取する位な願心と行持とがあつて始めて其家が榮え、其子孫に大人物が輩出することを得るのである。拂拳棒喝は決して禪

の當體そのものではないのだ。

脚下の知れぬ拾得の詩偈

古來禪門の句には生硬にして咀嚼し難く、強ひて味はんとするも、恰も蚊子の鐵牛を咬むが如く、猿猴の月を捉ふるに似て、全く五里霧中に迷はざるを得ぬものが多い。これ決して奇を弄し、難を目的とする譯ではないが、咀嚼せんとする自己に蚊子の力、猿猴の智すらないのに、其對者は人天の命脈も指呼の間に受けんとする作家の垂示なるを以て、之を體得せんとするには獅子奮迅の勢を以て實參實究せねばならぬ。

昔し支那天台山國清寺に寒山拾得と云ふ二人の隱者が居つた。寒山は今日傳へらるる「寒山詩」にても知らるゝ如く其詩囊は極めて豊かなものであつた。拾得に至つてはそれ程でもないが、然し句裏に含まれたる無限の妙味に至つては何れ優劣の差別はない。此の拾得と云ふ名は子供の時分に拾はれたから、其儘名としたものである。國

清寺に在つては毎日氏神へ供へ物をする役をやつて居た。所が何を供へても直ぐにソレを下げて食つて了ふ、或日の事例により供物をする時、忽ち一羽の鳥が飛び來つて食ひ散らした、拾得之を見て「オノレ氏神奴、眼の前にある供物の番をしながら鳥に喰はすと云ふ事があるか、實に相濟まざる奴だ」と云つて神體を取出して打擲した事があつた。普通の者から見ると狂人だか仙人だか愚人だか、賢人だか、殆んど拾得の脚下は分らなかつた。偶々其作詩を見るに

非底紅塵生

高山起波浪

石女生石兒

龜毛數寸長

欲覓菩提路

但看此榜樣

と云ふが如き情解分別を以て見るべからざる難句が多い。之を直譯すれば井戸の底からほこりがたつて、山から狂瀾怒濤を起し、石女が石兒を生み、元來ないと云ふ所の龜の毛が五六寸も長く生へて居るぞ、菩提の路を覓めんとする者は但だ此の榜樣(手本)を看よと云ふのであるが、其真味に至つては三寸の舌頭も用不着、五寸の筆管も何等

の用を成さぬ、要は各自に參得して此の石餅鐵飯を咀嚼すべきである。

鬼文常と高津柏樹

前黃檗宗管長高津柏樹禪師は白髮清癯、童顏長髯、其容貌は見るからに神々しく、近づくものをして自ら有難き感を起させる。

禪師は天保七年四月七日を以て豊前小倉に生れた。父は藩の擊劍師範役を勤めて居つた青柳彦十郎と云ふ人で、禪師は其次男と生れたが、父母の極力反對したに拘らず、幼年の師は只僧侶になれば萬人の上座に据はれると云ふ無邪氣な考へより、僅かに八歳の春、福聚寺月桂和尚に就いて出家得度を遂げたのである。

既に自ら進んで出家した身の、是非とも立派な僧侶にならねばならぬと云ふので、大奮發心を以て佛道修業に精神を砕いた。十九歳師寮寺を出て、筑後柳川に福嚴寺獨唱和尚を訪ひ、更に鬼文常と稱せられたる高德を豊前永福寺に訪うて親しく其相槌を

受くるに至つた。既に鬼と云ふ接得の手段の如何に辛辣なるかを察するに足るてはな
いか、多くの雲品水弟は一解として止まるものなき中に、獨り禪師のみは能く鬼文
常の嚴正なる點檢を受け、胸中自ら浩々地なるを得たりしは、其心勞の程も思はる
るのである。禪師は他日黃檗宗に名を成さんとする未成品、鬼文常は臨濟一流の老師
家顔々相對して中に影像なく、二面裂破の端的は佛眼も窺ひ難きものであつたらう。

面皮を療きし女禪客

法燈國師の歌に「世を捨て、身は無きものと思へども雪の降る日は寒くこそあれ」
如何に通世出家の身の上とは云へ夏の眞盛りには汗も流れよう、冬の雪には寒さに震
へもしよう。乍併、出家と俗人との差別は單に寒暑や冷熱にあるのではない。石頭大
師は

吾れ草庵を結ぶ寶具なし、飯了了へて從容として睡の快ならんことを圖る。乃至世

人住する處我れ住せず、世人愛する處我れ愛せず、庵小なりと雖も法界を含む
と云はれた。若し夫れ荆棘林を透過して、隱密の田地を得るに至れば、自らなる光
風清月、諸天花を捧ぐるに路なく、外道窺に窺ふに門無きの境涯に達することを得る
に至るのである。さればこそ古人は道の爲めには身命を棄つるをも厭はなかつた。

昔遊ニ宮裡ニ焚ニ蘭麝。今入ニ禪林ニ療ニ面皮。四序流行亦如此。不知誰是個中侈。
武田信玄の玄孫にて總と名けられし窈窕たる美人、東福門院に奉事して蘭麝を焚き
し身が、一朝の發心に忽ち變る夜叉の顔面、斯くして求道の志氣は透得したものの、
思へば花の二十五歳、まして總女は血もあり涙も多かつた。我ながら變れる顔姿に、
思はず鏡を取り上げて其裏面に書き記したのが今の詩である。

總女は多年奉仕せし東福門院の崩御に逢つたのは、春まだ浅き十七歳の如月頃であ
つた。深く人生の無常を觀じて早くも出家求道の志を立てた。けれども人の世の常
として何事も思ふがまゝには成し遂げ得らるゝものではない、ましてや若き婦女子の

身、人の勧めに随つて松田某の室となり、嫁するに當つて三子を挙げなば去つて佛門に入ることを誓つたが、烏兔早々二十五歳にして第三子を挙げた。

多年の宿望を達するの時期は將に到來したのである。乃ち前約に依つて松田家を去り當時の名僧として聞えたる弘福寺鐵牛和尚を訪うて發願を陳述した。鐵牛は一見、總女の人を魅する絶世の麗質、眉宇に微く非凡の才智、必ずや會下の衆僧が道念の妨げと、強て聲を荒げ「佛敵法敵の化物、我門に入るを許さず」とすげなく拒絶した。

止むなく總女は白鷗師を訪ひしも、鐵牛同様「佛界の魔魅」として許されなかつた。於茲、彼女は深く人生を恨み、我身を咒つた。法を求めんが爲めには既に三人の愛子すら棄て、顧みないではないか。己れ厄介千萬な我面よと……殆んど涙も出でざる迄に深き思ひに沈み、何處と宛もなくとぼくと門前を下り、民家に一夜の宿を請うた。折しも爐にある烙鏝、取るより早く我面へ當てた。見る／＼花の顔せは焦け爛れ、眞の化物同様、二目と見られぬ淺ましい姿となつた。これならばと、再び取つ

て返へした白鷗師の門前、和尚之を見るより内心は總女の赤誠に泣いた。直ちに佛前に於て丈なす黒髪は剃り下され、得度の式を擧げて了然尼と名けられた。昨日に變る我姿、般若の鬼面も斯くやと思はるゝばかり變り果てし顔せを見ては、流石千萬無量の感に堪へなかつたであらう、鏡裏に記された七言絶句は彼女の女美容と共に今後尙禪林に唄はるゝ事であらう。

併し以上の物語は多數ある求道者中の變態であつて、常識を以て判断す可からざるものである。されど今人の如く一寸素見半分に禪堂に坐り、和尚の一喝に逢うて遁げ出したと云ふが如き不真面目なる似非禪者、頭はよしや圓頂の黒衣を身に纏ふとも、心は俗界を離れざる現代の僧侶等は、深く自ら省て了然尼が發奮の意氣並に彼が一生の事蹟に鑑みるところがなくてはなるまい。

すめば見えにこればかりの定めなき

今宵や水にやどる月影 永範

勝海舟の鍊膽術

幕末の偉人、勝海舟は少より精神を鍛鍊して不動智を研ぎ、臨機應變殺活自在の妙を得られた人である。その修業は全く禪學と劍道の二途より得たもので、その修禪の一段に就いては海舟自ら人に語つて、斯く云はれて居る。

「彼の島田と云ふ先生が、劍術の奥儀を極むるには、先づ禪學を初めよと勧められた。それがたしか十九か二十の時であつた。手島の廣徳寺と云ふ寺に行つて禪學を初めて、大勢の坊さんと禪堂に坐禪を組んで居ると、和尚が棒を持つて來て、不意に坐禪をして居るものゝ肩を叩く。すると片端から仰向けに倒れるものが澤山ある。ナニ皆が坐禪しても、錢の事やら女の事やら、甘いものの事やら、いろゝの事を考へて、心が何處にか飛んでしまつて居る。そこを叩かれるから吃驚してこらげるのだ。老爺んなかも、初めはこのひつくり返る連中であつたが、段々修行が積むと、

少しも驚かなくなつて、例の如く肩を叩かれても、只僅かに目を開いて見る位の所に達したから、引つゞき殆んど四年間眞面目に修業した。

此の坐禪の功と劍術の功が老爺の土臺となつて、後年大層爲めになつた。瓦解の時に萬死の境に出入して遂に一生を全うしたのは、全くこの二つの功であつた。あの時分は随分刺客やなんかひやかされたが、何時も手取にした。此の勇氣と膽力は、畢竟この二つに養はれたのだ。危難に際會し、逃れぬ場合と見たら、先づ身を棄てゝかゝつた。そして不思議にも一度も死なゝかつた、こゝに精神上の一大作用が存在するのだ。人一たび勝たんとするに急なれば、忽ち頭熱し胸躍り、措置却つて顛倒し、進退度を失するの患あるを免がるゝ能はず。若し或は退いて防禦の位置に立たんと欲す、忽ち退縮の氣生じ來つて、對者に乗ぜらるゝ事、大小となく此規則に支配せらるゝのだ。老爺は此人間の精神上の作用を悟了し、何時も先づ勝負の念を度外に置き、虚心坦坡、事變に處した。それを小にしては刺客亂入の厄を免れ、

大にしては瓦解前後の難局に處し、綽々として餘地があつたのである。これ乃ち禪と武士道の賜物なりと感謝して居る。

擊石火、閃電光中に向つて逆順縦横の機用を現するは素是れ禪の本面目、十方坐斷、殺活自在は劍道の奥儀である。されば近くは乃木大將の如きも物に南天棒に參じて「趙州露刃劍」の一著を打破して無罣礙なることを得た。之を遠き古へに求むれば數多くある中にも、天正年間隨翁尚和の門に參じた中山家範が遺偈の如きは實に古今獨歩の概がある、曰く

提起吹毛劍。凡聖齊潛蹤。清風拂明月。明月拂清風。

この境地に至るには、幾度か喪身失命の苦難あることを知らねばならぬ。

惡辣の師家を選んだ祥山和尚

其名を聞いた丈でも震え上つた攝丹境永澤寺の活埋坑に在つて、四來の雲衲を接得

しつゝあつた上田祥山和尚。今は名古屋市外覺王山日暹寺副住職として幾多の雲兄水弟居士大姉を接得して居る。濃厚玉の如き老師家ではあるが、今より十年前以前可睡齋僧堂の師家として警策を握つた時分には、其提撕は峻嚴無類、人稱して鬼和尚と云ひ、參禪者の中には短刀を懷にして入室した者もあつたと云ふ位。

和尚は但馬國氷上郡に生れた。年甫て八歳、中竹田村の竹象寺に入つて剃髮し、十歳にして上田古同和尚の弟子となつたが、後には丹波圓通寺に赴いて、目下永平寺貫首として日本佛教界を風靡して居る日置黙仙和尚の會下に投じた。日置師の鉗鎚を受くること五年、去つて尾張正眼寺に濤聽水の門を叩き、居ると一年にして更に禪の蘊奥を究むべく眼を濟下に轉じた。

當時但馬國朝來郡に開單せる越溪老漢は、釋宗演師の授業師で臨濟一流の惡辣なる老師家であつて、京都妙心寺の僧堂と併せて接得の任に方つて居られたのである。和尚は此處に掛錫せられた、然るに間もなく越溪老漢は但馬を引揚げて妙心の僧堂に歸

惡辣の師家を選んだ祥山和尚

單することになつた。和尚は此時竊に間道を通り、老漢の未だ歸らざる妙心寺に突然新に掛塔を申込んだ。この奇策のために相變らず老漢の提撕を受くことが出来たのであるが、此一事を以ても修行時の熱心と努力とを窺はれるのである。然るに不幸にも其後半歳ならずして老漢の遷化に逢ひ、和尚の失望落膽は實に一通りてなかつた。更に勇を鼓して濟下の真髓を獲得せんとの志愈々堅く、越溪老漢の後任確定迄は約一年間、大徳寺の牧宗和尚に通動して只管辨道せられたのである。

和尚は當時の状態を予に語られた事がある。「朝は未明に起て大徳寺に行き、歸つて來ると托鉢三昧ぢやから中々忙はしい、一杖一笠が自分の財産、光風清月を友として居るこの境涯は實に愉快なものであつた」と、其後越溪老漢の後住として赴任せられた虎關和尚の坐下に在ること五春秋、具さに濟下の宗風を會得することが出来た。更に悟後の修行として伊豫八幡濱に西山禾山和尚を訪ひて其室中に投じ、遂に和尚の印可を得るに至つた。

禾山和尚の機鋒の鋭い事は今尚ほ知る人が多くあるであらう、和尚の行履は項を別にして記する事とする。難入難解は素是れ禪の本分なりとは云へ、祥山和尚の如き自ら進んで惡辣無類の濟下の老師家を叩いて其心要を練磨せし意氣に至つては、蓋し現代に多く居る洞門の師家中實に曉天の星である。

禾山會下に在つては、毎日午前二時に井戸端に出でては冷水を浴び、二ヶ年の星霜は毎夜全く坐睡で通されたとの事である。以て其修行の一般を知ることが出来るてはないか。

辛辣無類の燒禾山

禾山和尚は燒禾山の綽名と共に資性の峻嚴なる、接得の惡辣なる、禪門近代に珍らしき老師家であつた。その燒禾山の稱ある所以は、曾つて自坊の火災に逢ひ、火勢愈々甚しく將に越溪和尚自譯相傳の「碧巖集」と「臨濟錄」の二冊が一片の煙と化し去

らんとするを見るや、突如身を齧して火中に投入し、全身火を以て包まれつゝ、幸に法寶を取り出した。和尚の眼中には法の尊ぶべきのみあつて、身の焼け爛れることには頓着なかつた。今人口を開けば「爲法不爲身」杯と豪さうな事は云ふものゝ、さて誰がつてかこれを實現した好箇の衲僧があるであらうか。禾山和尚は實に此一事丈でも非凡の師家であつたと云ふ事が分るのである。

随つて衆を接するや一點の情味を挿まず、一步たりとも假借せぬのである。毎日四回宛の獨參、深夜の點檢にも觀音堂の椽に端坐して居る姿を見れば喜ぶと云ふ様な風で、會下の大衆は多く長坐不臥、脇席に着くる者すらなかつたと云ふ。

和尚は未だ曾つて居士を接せず、教相を得意とすると雖も人の爲めに書を請ぜず、専ら打坐を主とせられた。されば政治界の名士として將た禪門の老居士として誰知らぬ者なき河野廣中氏の如きは最も和尚に歸依して居る一人である。氏一日教を請はんが爲めに、遠く伊豫八幡濱まで出かけて行つた事がある。

寺内の役僧雲衲等は豫て盛名を聞いて居る政界の名士來れりと云ふので、之を歡迎せんが爲めに上を下への大騒動をやつた、和尚は獨り「河野がやつて來たか」と濟まして居つたが、愈々參禪の一段になると、和尚何と思つたものか有無を言はず氏を室外に叩き出した、普通の者ならば憤然として立去るべき所である。然し河野氏は腹が出来て居る、和尚に叩き出され乍ら其儘椽側に端坐した、他迄機鋒穎脱の和尚は「何を生意氣な」と云ふので、這度は足を揚げて氏を蹴つた。大地へ蹴落された河野氏は端然自若として鬚髮一本動かさず、其儘地上に兀坐三昧。聽て親しく教を請ふに至つたと云ふ事である。

大海を掀翻し須彌を踢倒するも敢て奇とするには足らぬ衲僧門下の活作略、しかも和尚の如きは眞に生死の流を超えて、迥かに常格を出てし好箇の那人と稱すべきではあるまいか。

慢心の折伏に發奮せる東坡居士

法幢を建て宗旨を立つるは禪家尋常の茶飯、若し格外の句を辨得せざるに於ては其本分に背く、いてや之より遍なく天下を廻り名僧知識を検せんものと志したのは、彼の有名なる東坡居士が年少氣鋭の折であつた。

蒼龍の蟠まる澄潭ありとも知らずに、先づ第一に訪うたのは玉泉の皓禪師である。禪師迎へて「貴官の名は」と問へば「秤」と答へる、謂ふこゝろは、天下の名僧知識を片端から我が此秤にかけてみやうぞといふ意氣込。禪師聞了りて問一髪を容れず「喝ッ」と大喝一聲「重き事多少ぞ」汝が秤にかけて見よと謂はぬばかり、流石の東坡も禪師の不意なる一喝には腦天より足の先までビリ／＼響き、背には時ならぬ大汗を流し、二の句も繼げずに遁出した。

それにも懲りずに、去つて金山寺の佛印禪師に參じた。將に禪師の室に入らんとす

るや、禪師は聲嚴かに「此間汝の坐所なし」這入つてもお前の坐る所はないぞと、云ふと東坡も負けては居ない、「暫く和尚の四大を假りて禪床とせん」和尚の頭でも圓坐にしませう。何ッ頭でも「山僧の四大もと無、五蘊有にあらす、何を以てか禪床とせん」四大五蘊一切皆空。何處へ坐るのか、うつかり坐つたら腰が抜けやうぞ。とやられて東坡またも石地藏同様、爾來前非を悔ひ、熱心に研鑽の功を積んで、漸くその妙境に達した。

法は見聞に非ず、言思を絶す。されど東坡の會得せる禪要を知らんと欲せば、盧山の三首を以て盡されてあると云うてもよい。居士が投機の偈に曰く

横看成嶺側成峯。遠近高低各不同。不識盧山真面目。只緣三身在此山中。
 同じ一の盧山でも「横さまに看れば嶺となる、側てば峯となる」平たく布團きたる姿の嶺ともなれば、突立つて聳えた峯ともなる「遠近高低各同じからず」悉くが違つて見える。何れが盧山の真面目か。どつちともつかぬ、盧山の本來は高低遠近に干か

慢心の折伏に發奮せる東坡居士

らず、嶺にあつず、峯にあらず、同時に嶺たり峯たりである。人生一切の憂喜苦樂も、之を看取する者によつて定まるのであつて、自ら其ものに成り切つて了へば何れが眞相であるかと云ふ事は一寸分らぬ「只身の此山中に在るに縁る」が爲めてである。次に

盧山煙雨浙江潮。未レ到千萬憾不レ消。到得還來無レ別事。盧山煙雨浙江潮。差別が即平等、平等が即差別。遠近高低のあるまゝが無い。無いまゝが有る。畫きた來つた盧山の眞面目を打破し去つて、そこに現はれる眞の面目、正見から出て正見に還る。こゝに絶對の妙味がある。この妙味を味ひ來つて、果然實在の妙音に接し、天地の好景を看取し、法身の靈境に徹到することが出来る。

溪聲悉是廣長舌。山色豈非清淨身。夜來八萬四千偈。他日如何舉示人。この一首は實に東坡の全身の脱體現成である。前の二首は深味あるとは謂へ、所謂解釋に過ぎぬが、この溪聲山色の一段に至つては實に無限の妙味がある、不盡の靈音があるではないか。

發狂と誤られたる阿察女

瑠璃殿上には知識なく、水清くして魚棲まずのたとへ、應機接物に巧みなる白隱和尚の會下には多くの居士や大姉があつた。中にも阿察婆さんの如きは白雲を蓋と爲し、流泉を琴と作すの活手段、白隱會下第一流を以て聞えたものである。此の婆さんは娘の時分から天性非凡であつて、人を驚かす様な奇行が澤山あつた。

或日の事、自分の父が最も大事に崇めて居る法華經の入れてある箱の上に、四斗椀のような大きなお尻を掛けて、俗諺か何かを唄うて居た。此有様を見た父親は吃驚仰天、言語道斷不届至極な奴ぢやと呵かり飛ばした、所が娘の阿察は一向平氣なもので「何こんなものが勿體ない事があるのですか、何で罰が當りませう、紙に書いた死物の法華經、一體何の役に立てようと思ふのです」と洒蛙々々して居る。父親はあまりの事に呆れ果て、早速平素懇意にする白隱和尚の所に駆けつけ、委細の顛末を物語り、

發狂したのではありませんでせうかと相談した。

所が禪師の言はるゝには「よし／＼夫れでは此紙へ納が何か書いて遣るから、それをソット娘の部屋へ貼り付けて置くがよい、そして娘がそれを見て何んとか云ふてあらうから、其結果を早速納に知らすがよい、さうすれば發狂か發狂でないかスグ分かる、兎に角之を持つて行くがよい」と云つて書き與へられたのが、即ち

暗の夜に鳴かぬ鳥の聲きけば生れぬ先の父ぞ戀しき

と云ふのであつた。然るに娘は不圖これを見て「ハハア白隠さんの書かれた歌は面白い、妾の思つて居るところと此歌の意とは少しも違つて居らぬ」と感心して居る。

此様子を眺めて父親は直に白隠和尚を訪ひ、實は斯々の始末で、斯様に申して居りましたと述べた。禪師聞き了つて「それでは發狂でも何でもない、實に天晴な女丈夫ぢや、お前はよい娘を持つた仕合者よ」と云はれて父も初めて安堵の思ひをしたが、之が動機となつて、爾來白隠の會下に參じ、遂には聲色推裡に坐して凡を超え聖を超ゆる

に至つた。

所が阿察は元來四斗樽の如き醜婦であつたから、一生獨身で暮らすと云うて居たが、其後父の勧めにより、婿を貰ひ子供も出来て長壽を保つた。老後になつてから孫を喪うた時に、毎日泣いて泣いて泣き崩れて居た、其有様を見た或人が、此の婆さんは悟つて居ると聞いたのに、此悲歎は何事であらうと詰つた。阿察婆さん其返答が面白い「わたしが泣いて居るのは眞面目であつて、一滴々々が寶珠であるのが分らぬか」と云つた相である。寶珠の涙は蓋し阿察婆さんにして初めて流し得るところであらう。

餅屋の説明をやつた小僧さん

或禪寺へ行脚僧が来て、和尚に面會を乞うた。取次の小僧氣をさかしてか「和尚は留守ぢやが用事なら聞きませう」といふ。「小僧では駄目だ」と嘲笑ふ「形は小さくとも智慧は大きうござるぞ」とやつた。此奴面白いと行脚僧は、指て小さい輪形を見

せた。小僧すかさず大手を廣げて見せる、指一本を出せば五本を出す。更に三本を出せば、指で一寸眼の下を押へる。行脚僧は恐れ入つて三拜九拜惶惶に去つて了つた。行脚僧の方で小さい輪を造つたのは「お前の胸は」と問うた積り、小僧に「大海の如し」と大手を廣げられて、「お前の一身は」と指一本を出せば「五戒を持つ」と五本出す。「三界は」と三本出せば、「眼の下にあり」と眼下を押へる。これは叶はんと三十六計盡きて逃げ出したのである。小僧すら斯の如し、況や和尚の機略をや、と行脚僧は驚いた事であらう。處が最前から、襖陰に隠れて此の様子を眺めて居た肝心の和尚は、何をして居るのやら小僧のやつた手真似は一向分らない、行脚僧の後姿の消えた頃、窃に襖の陰から現れ出て、小僧を呼んで其故を問うた。小僧澄しこんで曰く「あれは屹度俺の實家が餅屋だと云ふことを知つて居て、お前の内の餅は此位ぢやと、小さな輪をして見せますから、こんな大きいのだと手を擴げて見せました。一文かと一本出したから、五文ぢやと五本出せば三文にせよと云ふから、あまり馬鹿にして居ると思

うて、赤目をしましたので、雲水さんはとう／＼逃げて行かれました」と云つたとの話。

同じ指と指との問答ながら、此指で釋尊の如く金波羅華を拈すれば迦葉の微笑となり、俱胝の指は佛法的々の大意を説明す、乃至臺山の路を教へた路傍の婆子が指も、法界萬法の真理を問うた行脚僧の指も、餅屋の説明をやつた小僧さんの指も、指に變りのあらう筈がない。要は自己の識見如何にある事を知らねばならぬ。

口頭三味の釋宗演師

魚行いて水濁り、鳥飛んで毛を落すの類、いくら騒ぎ廻つても必竟口頭禪、偉さうに並べて見ても云はゞ頭ばかりの禪ぢや、と云ふものも世間にはあらうが、併し一時の流行にもせよ社會の各階級に禪と云ふ觀念を植ゑ付けたのは、確かに釋宗演師の所謂口頭禪に負ふ所が多い。

師の講演及提唱は如何にも巧みである。一年中殆んど自坊に止住する隙もない程に東奔西走、到る處の請に應じておしやべりをする爲めでもあらうが、實に齒切れのよい講演振。球の盤に轉ずるが如く一撻々々が悉く後學初機の爲には無限の詮注となり、一拈一撮皆是れ七通八達の妙道となる。

されば師の鎌倉に在るや、東都の學者學生引きも切らず、近くは神尾大將を初めとして其門を叩く知名の士が頗る多い。想ふに師の世に重きを置かるゝ所以は、何となく其氣宇のよく時代に相應し、其頭腦のよく時代を理解し、且つ最も力あるは言説の布教に熱心なるが爲めである、現代の所謂お師家様なる人々は幼少時代から禪堂に入り、學校教育は少しも受けずに徹頭徹尾禪的に仕上げたるに引換へ、師は福澤諭吉翁の三田塾に學び、英語もやれば哲學もやる、特に今尙ほ坐下の居士鈴木大拙に就いて毎週語學を修めて、世の進歩に遅れざらんことを努むる如きは、兎角お天狗になりたる禪門の後進に對して、啓發するところ頗る大なりと謂はねばならぬ。

師は若州小濱の生れ、室號を楞伽窟と云ひ、洪嶽と號す。印度歸朝後間もなく圓覺寺管長となつた、時は明治二十九年、師は漸く三十を越したばかりである。斯くも榮達の早かつた所以は素より師の聰明なる頭腦と不斷の努力にありし事は勿論であるが、又一面には青年時代の第一歩に於て鳥尾得庵の鑒識に觸れ、今北洪川の如き俊傑の錯に因ることは争はれぬ事實である。道元禪師は其著「學道用心集」に於て、參禪學道は正師を求むべき事を示されて曰く

行道、可レ依ニ導師之正與ニ邪歟。機如ニ良材一。師似ニ工匠一。縱雖ニ良材一、不レ得ニ良工一者、奇麗未彰。縱雖ニ曲木一、若遇ニ好手一者、妙好忽現。隨ニ師正邪一、有ニ悟真偽一、以レ之可レ曉。

と、蓋し人材の世に在るや、須らく其先輩と仰ぐ人物を選ばねばならぬ。師の門下として多少世に知られて居るのは、埼玉平林の大休宗悦、谷中兩忘庵の釋宗活の二師あり宗活和尚の門には文大出身の後藤宗碩、理大出身の早川鐵巖等を養成

して居る。門風益々昌んなりと謂ふべしてある、が西の禪者は、斯くては「愈々頭の禪」だと悪評するかも知れぬ。

空に印し泥に印し水に印して他を驗するは禪門の三要語である。人は固より一人にて完全なるとは出来ぬ。

成る程、師の講演は禪僧としてあまりに巧み過ぎる。泥裡に土塊を洗ふが如き無駄辯のない代りに、一句一言群を驚かし衆を動かす底の活波瀾に乏しい。平易の間に衆を導くには巧者であるが、其提唱振は圓熟過て飽足らぬ點がある様に思ふ人は必ずあるであらう。

師今や再び一派の輿望を負うて圓覺寺派の管長となる、既程を顧みれば、朝鮮、滿洲、印度、歐米と師の足跡は世界に及んで居る。鎌倉禪のオーソリチーを以て目せらるゝ師の得意時代であらう。

風外和尚と猫

獨り寰中に據つて法幢を建て群を驚かさんとする者は多い、けれども开は眞箇衲僧家の本分ではない。劔刃上に殺活を論じ、棒頭上に機宜を別つの作略がなくてはならぬ。坦山、奕堂、鼎三、藏雲の禪傑を其門より出したる風外老漢の如き、蓋し近代稀なる洒脱の高徳と稱すべきである。

「大山肉山は野狐窟なり」と喝破して大刹に住持するを嫌ひ、讚州高松藩の家老が藩主の命を奉じて其香華地に住することを請うたが、和尚は平素の持論を主張して一言の下に拒絶した。尙再三再四懇請して止まず、時に和尚は俗に云ふ「あかんべい」をやつて家老の度膽を抜いた。

和尚は好んで虎を描いたが、其虎は一種氣韻の高い趣がある、けれども一見恰も猫の如く柔和に見ゆるので、人は和尚の風采の溫柔にして猫の如く、一度這箇の端的

に逢着するや猛然として虎のそれにも似たるを稱して「猫和尚」と綽名した。和尚香積寺住山の砌、或年の夏、鎌倉圓覺寺の使僧が来た、和尚は書院に導きて頗る丁重に待遇した。其夕方和尚は浴衣がけに下駄を穿き、團扇片手に庭を散歩して居ると、最前の使僧が簾越に之を見て

「猫ぢや猫ぢやともしやいますが、猫が下駄はいて来るものか」

と云つたが、和尚は知らぬ顔をして居た。其翌朝、使僧出發と云ふので、會下の大衆は山門頭に並列して尊宿を送る威儀を具して居る。和尚も亦使僧の後に附いて、今や門を出てんとする一刹那、不意に

「それ猫が！」

と叫んだ。使僧が喫驚して後を振向く途端、和尚は呵々大笑した。是れ所謂賊馬に騎つて賊を追ふの禪機である。後年坦山師が和尚の描いた虎を見て「是れ恰も猫の如し、しかはあれど自ら威ありて犯すべからざるの趣あり、風外の外溫柔にして内に惡

辣の手段あり、儼として犯すべからざるは、洵にこの圖の如し」と、實に適評である。

不意に大悟せる張九成と夢想國師

往昔、支那の十六開士、洛僧の時に於て例に隨て浴に入る、忽ちにして水因を悟ると、籌を帷幄に運し勝を千里に決するものは、睡眠の間にも一點の油断なきが如く、一舉手一投足喫茶喫飯、皆是れ斯道の往來ならざるはない。されば香嚴は洒掃中擊竹の聲を聞いて悟り、嶺雲は桃花を一目して大悟通達した。茲に尤も奇抜なのは支那に於ては宋の張九成と云ふ翰林の大博士があつた。大慧禪師の室に參じて、眼光落地の大事を究明すること數年に及んだ。禪師は九成の爲めに或る動機から十七年間も流罪に遇つた事がある、隨つて九成の發奮も尋常一様ではなかつた。禪師より授かつた公案を拈提しつゝ、正念工夫、殆んど寢食を忘ずる位であつたが、一日東司(便所)に入つてウンと氣張つた一刹那、豁然として恁麼の事を悟了した。其投機の偈は今日

に傳はらざるも、定めし臭氣紛々たるものであつたらうとは後人の推察である。
 この不意の出来事に依つて大悟徹底せられた人は我日本にも多くある、中にも夢想
 國師の如きは亦是れ斯界の第一人であらう。國師が或時常州白庭の比佐居士の處にお
 いてになつた、其夜、眞暗な室内に於て兀々端坐、聽て夜も更け渡つたる頃睡氣の催
 すまゝ、後に壁があるとはかり思つて、ソツト身體を寄せらるゝなり、ズトンと仰向
 に倒れた。實は後方には何もなかつたのである。その刹那に於て國師は忽然として省
 悟した。

多年堀地覓青天、添得重々礙膺物、一夜暗中颯碌斬、無端擊碎虛空骨、
 と、如何にも眞情を流出せる投機の偈ではないか。作家の方に辨すべきは不意の出来
 事である、此時に於て自家屋裡の寶珠を擊碎する者の多き中に、虚空を碎いて却つて
 格外の機を現出するは、蓋し禪家獨得の活三昧である。

與奪自在は禪の本分

前内閣の尾崎法相が、曾て野に在つて憲政の神に祭り上げられて居た時分の事、從
 書至夜の間斷なき演説三昧、例の悠然たる態度悠揚迫らざる雄辯を奮つて當時の非政
 を攻撃したものである。劈頭第一「寒威肌に徹する如月頃、偶々郊外に杖を筇いて微
 に綻び初めし一枝頭の梅花を眺めた時、早くも春到れりと觀ずるは是れ人間として怜
 惻なものである、愚物になると爛漫と咲き亂れたる櫻花の下に瓢箪を叩いて躍り狂つ
 た後でなければ春來れりとは思つて居ない。要するに現内閣の施政の方針は前者に非
 ずして寧ろ後者に屬する事を吾人は憾みとするものである……」と先づ理詰にし
 て成程と聽者を靜めるも手際は全く天下第一品である。けれども禪の本分底より見來れ
 ば法相得意の譬喩も決して當を得たものではない。

碧巖集第一則に「山を隔て、煙を見て早く是れ火なる事を知り、牆を隔て、角を見

て便ち是れ牛なることを知る。舉一明三目機鉢兩、是れ衲僧家尋常の茶飯」と喝破した。然らば真個伶俐の漢とは何ぞや、同則は「衆流を截斷するに至つては、東涌西没逆順縦横、與奪自在なり」と示された。即ち奪ふ時んば天地宇宙、人法一切共に空じて了ふ、所謂所縁の境も能縁の心も全く無みして了つて真正の無一物になる所である。與へる時んば草木國土法界人境悉く一物を餘さず與へ了つて初めて些子に方るの分ありて、この位の機用がなければ禪をやつて居るなどとは許せない。

之に就いて往昔支那に有名なる南院和尚と風穴和尚との問答がある。一日南院和尚問うて曰く

「如何なるか是れ臨濟の人境俱奪」

とやつた。風穴和尚之に答へて

「足を踏んで進前することは須らく急々なるべし、鞭を促して鞅に當つて遅々たること莫れ」

と答へた。これは故事に寄せて禪の大活大用を顯したものである。初めの「足を踏んで進前するは須らく急々なるべし」と云ふは、昔漢の高祖に事へて、戦へば必ず勝ち攻むれば必ず取ると云ふ、軍に長じて居つた韓信が部下の將卒を撫育して三軍に大勢力の有つた所から、あのれも一旗立て、遣らうと思ひ、高祖に對つて云ふやう「どうか私を假の王に封じて下さい」と云つた。處が高祖は忽ち烈火の如く怒り「馬鹿!!!」と喝破して起ち上がらんとする一刹那、そこに居並んでゐた張良や陳平等は若しや此際高祖と韓信と隙を生じ韓信をして怒らしめたならば、さてこそ國家の一大事である」と氣遣つたので、早速の機轉にそれとなく高祖の足を一寸踏んで其意を漏らした。流石は明君だけあつて其意を覺り、忽ち態度を一變し、最初云うた馬鹿の一喝を善い意味に轉じ「馬鹿な奴だ、貴様ほどの功臣であり乍ら、假りの王にして呉れとは意氣地のない申分だ、ナゼ真正の王を望まないのか」と云ひ放ち即ちに齋王に封じた。今風穴和尚の南院に對する一拶は、此故事を引き來つて、道に進前する場合には人境俱に奪

つて驀直に遣らなければならぬと云ふ事を示したものである。

把住放行擒住自在の手腕あつて初めて國政にも參與し得べく、真に外交の妙作略も之より顯現することを得るであらう。

臨濟打爺の拳

虎穴に入らずんば虎兒を獲ると能はず、とは古聖の訓言、今禪に於ても幾多の荆棘林を透得するに非ずんば、到底孤峯頂上の明月を眺むる事は出来ぬのである。今茲に述べんとする臨濟禪師の如きは蓋し苦修辨道、具さに辛酸を嘗め盡し、暫々貶剝に逢うた賜物と謂はねばならぬ。

臨濟禪師諱は義玄、曹州南華の人で俗姓は邢氏と稱し、幼少の時分より穎異を以て聞え、成長の後は孝を以て弘く世間に稱譽せられた。後求道の志堅く父母に請うて出家得度の身の上となり、所有る經論を博く研究し、道心堅固に戒律を修めて居られ

た、或時情ら考ふる様、從來の研讀は要するに濟世の醫方にして佛教の第一義諦に非ず、加かず教外別傳の宗を會得して其奥旨を究明せんにはと、忽ち禪衣に更めて問師參叩の鹿島立、先づ第一に當時有名なる洪州黃檗山大安寺の希運禪師を訪ふてその禪林に入つた。

黃檗の希運禪師は百丈懷海の法嗣であつて、「身長七尺。額有圓珠。天性會禪」と傳記にある如く、その一棒一喝は支那四百餘州を震動せしめた。今や臨濟禪師は親しく師の膝下に參じて、黙々端坐すること凡そ三年。一日僧林の首座陸州和尚臨濟に向つて曰く

「上座在此多時、何不_レ去問話_一」

と勧められて、始めて希運禪師の室を叩き、

「如何_一 是佛法的々大意_一」

と問うた。機鋒峭峻を以て聞へたる希運禪師、早くも臨濟の將來あるを看破してイキ

ナリ痛棒を加へて室を投げ出した。三度佛法の大意を問うて三頓の棒を喫すると傳へられて居る。そこで臨濟熟々考へられるには、最初行脚に出かける時には、佛教の學問は藥の能書であつて、一切藏經は皆な藥の處方に過ぎないものである。一生この藥方のみ附け廻されてゐるのは残念である。畢竟佛法は脱落が根本であるから、須らく身心脱落をせねばならぬと決心して黄檗の會下に參じたのであるが、居ること三年にして結局三頓の痛棒を受けしのみ。寧ろ此際他の禪林に行つて見るに若かずと思ひ立つて、其由を陸州首座に話した。首座は臨濟を憐みて希運禪師を訪ひ

「問話上座甚不可得。和尚何不穿鑿教成一株樹去。與後人為陰涼」と諫言したが、黄檗の親切は陸州の窺ひ知る所ではなかつた、只一語「吾已知」と言うたのみである。そこに臨濟は請暇に來た、時に

「汝不得向別處去。直向高安灘頭見大愚去。」
 老師家の徹惺なる面目は這の一句にも躍如として居るではないか。

そこで臨濟は早速高安縣に赴いて大愚和尚に相見した。而して黄檗會下に在りて、三度佛法的々の大意を問うて三頓の棒を喫へられたる顛末を物語り、そして某甲に何の罪ありて、黄檗は斯くも痛棒を喫へられたものであらうかと聞いた。大愚曰く

「黄檗與麼に老婆心切。爲爾儂が微困。更說什麼有過無過。」

あゝ黄檗は老婆親切なるものぢやと深く嘆賞した。言未だ終らざるに臨濟豁然として大悟徹底したのである。猶大愚は臨濟を試みんが爲めに「黄檗の佛法如何」と問はれか。すると臨濟は「黄檗の佛法多子なし」と答へ、起つて大愚の脇腹をば拳骨を以て三度突いた。大愚此に於て呵々大笑。汝が師は黄檗なり、我事に干はるに非ず」と云うて即刻退去を命じた。蓋し黄檗の老婆徹惺を稱譽した大愚は黄檗以上に法には親しかつた。

斯くて臨濟は再び黄檗として舞ひ戻つた。何にしに戻つたのかと、そしらぬ顔で問うたものゝ心の中では臨濟の大悟を看破して居たのである。親の心子知らず、臨濟は

大愚の許であつた一伍一什の話をした處が「大愚め、お饒舌りの老婆禪を遣り、クサつたナ、おのれ小癩な奴ぢや、今に見ろ今度こゝへ來よつたら、痛棒を喰はさにや置かぬ」と聞くや否や臨濟は飛び上つて黄檗を痛打すること數拳。

「虎鬚を捋るは危険だぞ」と黄檗口には云うたが、心中の喜びや如何ばかり。臨濟は茲に於て、悟後の修行の骨を折つて居たが、或夏の事、黄檗佛前に於て懸命に看經して居ると、臨濟其傍に來つて曰く「私はこれから歸ります」「汝何處に歸るや」「臨濟大聲一番」「是河南にあらずんば便ち河北に歸らん」

と答へて更に黄檗を打つ事數十拳に及んだ。是れ即ち臨濟打爺の拳と云うて、有名な話である。

乃木大將の參禪談

乃木大將が禪に參じて居た事に就いては世間兎角の評判をしたものであるが、大將

が參禪したと云うても、別に某會の會員と云ふ譯でもなければ、又提唱の席に必ず出席せらるゝと云ふでもない。随つて自ら一度も參禪の事を吹聴せられた事もなければ、碧巖録や無門間を懐に入れて禪を銜ふ人々とは全く其趣きを異にして居たのである。

大將が初めて禪門に入つたのは、明治二十年八月十五日の事、東京市ヶ谷藥王寺前の兒玉大將の邸に於て、偶然其席に來合して居た南天棒鄧州和尚に教を請うたのである。時に大將は佩劍を取つて和尚の前に置き

「禪師よ、吾は軍人であつて、佛道を修して居る閑がない。どうか私のために此の劍を以て説法し給へ。」

と云つた。和尚言下に件の劍を取り、更に大將の前に置き、

「柄は出家兒ぢやから劍は無用だ。然るに貴殿は今此の劍を如何に使用しようとするのぢや、サア言へ、サア言へ」

とつめ寄つた。すると流石は大將である。幾度か鐵馬に騎つて重城に入つた活作略、剛に逢うては乃ち柔、

「ハハア宜敷御説法を願ふ」

と云はれた。そこで南天棒に師弟の禮を取ることになつた。和尚は直ちに無字の則を與へたのである。

爾來熱心に斯事を參究すること數ヶ月、無字四十五則の公案は活達無礙に透過した。和尚は更に趙州露刃劍の公案を與へた、這裏に到つて左撥右轉、具さに辛酸を嘗め、一心不亂に工夫した結果、忽然として戸牖を豁開し、一夜瑠璃殿上の明月を我物にする事が出来た、即ち

趙州露刃劍、雪霜光焰々、纒擬ニ是如何、分身成ニ兩段

の一則を會得して八面玲瓏たり、「劍道の極意に一致してる」と云つて非常に喜ばれたとの事である。

禪は素是れ無影樹下の合同船である。大將も乗れば番頭も乗る、女も乗れば僧侶も乗る、併し海晏の清波は眺むる人々の機根によつて十人十色である。願はくは正しき發心を以て、真に禪者に恥ぢざる乃木將軍の如き行持を發揮するならば、禪と武士道の本面目は脱體露現である。

壙より堀出されたる通幻禪師

洞門に籍を有するものは誰でも知つて居る通幻寂靈禪師、攝丹の幽境に道場を構へて天下の活衲僧を接待した、其接待振の峻嚴なる到底今人の想像だも及ばぬところである、活埋敷の名久しく禪界を震撼せしめた一事でも乍入叢林の度膽を抜く、活埋敷とは其名の如く修行僧を捉へて生理めにした所、禪師の機鋒は萬丈の懸崖の如く、百萬の軍陣にも似て容易に接近するを許さぬのだ、けれども獅子は其子を試むるに千仞の斷崖より蹴落と云ふが、真個の衲僧は却つて禪師の會下より輩出して天下を風靡

した、今尙ほ通幻派を以て稱せらるゝ寺院は悉く其流を拘むだものである。

禪師は豊後國國東郡武藏郷に生れた。初め其母子なきを歎き佛塔に詣で、聖者を獲んことを禱つた、然るに間もなく梵僧が金盃鐵鉢を授くと夢みてやがて妊娠した、既にして將に分娩の紐を解かんとするに際して、果敢なくも遽かに死んで了つた。父の落膽悲慟一方ならず、涙片手に附近なる古廟の側に葬つた。然るに其後道行く人が其廟側にさしかゝると、怪しや土中より嬰兒の泣聲が幽かに漏れて聞える、驚き走つて其旨父親に告ぐると、父は奇怪の思をしながら墳を掘つて棺を開き見るに、玉の如き男の子が生れて居つた、その男の子こそ實に後代の法孫に偉名を轟かせた通幻寂靈禪師である。

父は驚きの中にも嬉しさ譬ふるにもなく、懷き歸つて産湯に浴して見ると「氣體芳潔にして異香あり」と書き傳へられたのを見ても尋常一様の嬰兒でなかつた事は明かである。一日占者が之を見て駭歎していふには、「此兒は凡流でない法器である、

古語に人聖子を産めば其母歿すといふことがある、必ず我言を疑ふな」と果して此豫言が適中した。

禪師は幼より群童に交つて嬉戲するを快しとせず、常に一室に端坐して書を読み、博く經史に通曉するに至つた。十七歳の時、故郷の大光寺に赴き、定山和尚を師として剃髮染衣の姿となり、翌年太宰府の戒壇に登つて大僧となつた。爾來苦修辨道、具に實參實究して道の爲めには殆んど身命を賭し、峨山禪師の會下に在つて大悟徹底し、應安三年細川頼之の請を受けて永澤寺を創立し、沙を陶り金を煉び、邪を摧き正に歸せしむるの宗風を鼓吹して、嚴令の範を示した。

夏冬が一所に來たか珍龍さん

入つては柱杖子を拈じ、出ては一錫杖を持し、柱杖子一度拈得すれば乾坤を定め、上下四維等匹なく、會下五十の雲兒水弟を接得して箇の宗風を立す、錫杖揮ふこと一

夏冬が一所に來たか珍龍さん

下すれば東南西北に箇の風規を現じて、許多の信徒を歸嚮せしめつゝあるは洞上の耆宿佐々木珍龍師である。

師は往昔日蓮上人が呱呱の聲を揚げたる安房國に生れ、里見の香華院として名ある關東の古刹、延命寺月海仙舟和尚の葬送を見て世の無常を觀じ、早くも出家得道の志を起したのは僅かに六七歳の頃であつた。發願九歳にして成就し、現延命主董竹園龍海和尚に就いて剃髮染衣の身とはなつた。爾來所有苦難と闘うて辨道修行をしたのであるが、初めて天台笠に袈裟行李、草鞋の紐を固く結んで行脚の途に就いたのは十四歳の春まだ淺き寒空であつた。

「人に異なるの行なひなければ人に異なるの名なし」古人の金言我を欺かずと發奮努力、笈を東都に負うて駒込梅檀林に入り、從晝至夜の苦修三昧、乏しき學資を托鉢に補つて一ヶ年間は全く長坐不臥、脇を席に着けなかつたと云ふ。この異常の勉學は直ちに効を奏して二級宛飛び抜け、入學以來滿一年、十八歳の春は支校學科六級を超え

て専門本校の三級生となつた。其間勵しき眼病の襲ふところとなり、藥價を支拂ふ半文錢の餘分なく、藥師如來に祈つて平癒せられし事もあつた。

其後専門本校は大學林と改稱されて麻布日ヶ窪に移轉さるゝや、師の囊中には全く資金盡き果て、止むなく暫時暇を請うては遠く神奈川横濱に迄も托鉢に出て、僅かに筆墨の料を貯へ、校内にあつては生徒一同が巡番に勤むる庫司の苦役を一身に引受けて常番となり、後、當時の學長たる折居光輪師の知る所となり、其行者となりて左右に侍し、傍ら正法眼藏を聴取せりと云ふ。

斯る有様とて、素より衣體を繕ふ餘裕のあるべき筈はない、入學以來一枚の法衣は金巾の破れ衣、一枚の袷は二枚の單衣となり、又綿を入れては綿入ともなつた。口善惡なき、ある生徒が

夏冬が一所に來たか珍龍さん

と、以て師の苦艱の一面を知り得るではないか。現今大榮寺僧堂を初め延命寺分單僧

堂も共に三粥を打し、粥と云ふも名ばかりの殆んど一腕數十の米粒の外は天井板の寫る如きを啜つて數十名の雲衲を育英しつゝあるも、「日々是好日」底の活消息、赤旛の下何時も清風を起しつゝある。師は常に會下の衆僧を誡めて曰く、

「死して叢林にあれば骨も亦清し」

と、眞に這箇の語を會得する者一人も多ければ多きほど、佛祖の大機は現成するのである。社會の風潮、日に月に苦艱を厭うて安逸に就かんとするの時、師の行履は實に後學の規範である。

白隱禪師の地獄極樂

巍々として天空に聳ゆる富士の雄姿と共に、駿河に其名高かりしは原の白隱禪師である。其明德は當時既に遠近に傳はつた。織田平次郎信茂と云ふ人、尾州侯東勤の砌、只一人列を脱して禪師の庵を訪うて曰く「私は好んで佛法を聞き、修行にも心がけ

この本庵に遇ふものは、
殺はつて、
白隱

て居りますが、聞けば聞く程疑ひが起り、薩張迷ひの雲は取れませぬ、特に地獄極樂の事が兎角氣になつてなりませぬが、第一其有無が承はりたう存する」禪師は黙然として聞いて居たが、突然大喝一聲「汝何者ぞ！」と怒鳴られた。意外の事に面喰つた信茂、言下に「武士で御座る」と。禪師嘲笑ひながら「何と申す、何！武士と申すか、汝若し武士ならば武士の道を修むるがよい、君の爲の忠には一死以て之に當れ、何事ぞ餘道に迷ふ木ッ葉武士、イヤナニ山伏か野伏か、いづれにせよ碌なものではあるまい」

玉は火を持って試み、金は石を持って試み、劍は毛を持って試み、水は杖を持って試むと云ふが、白隱和尚が殺活自在の妙手は觸處機に應じて活躍するのである。今信茂もこの語に接して腹の中は煮えかへるやうに憤つた、云ふ事にも程がある、あのれ坊主めがと思つたが、流石は道のためには親切である、しばし虫を殺して姿を改め「大善知識、よろしく御教を垂れ給へ」と請うた。然るに禪師は一層語氣を荒く「譴氣者め！

まだそんなことを言つて居るか、汝の如き奴は山伏や野伏でも勿體ない、先づ人間の仲間外れ、左様サ鯉節位のものだらう」ときた。信茂も堪らない。满面朱を注いで、額の筋がビリ／＼動く、覺えず腰のものに手をかけた。禪師はニヤリと笑つて「さうだ、鯉節ならまだ臺所の用にも立たう、其青筋では食つぶし……」と、皆まで聞かず信茂は「己れ何の遺恨があつて、武士に向ひ悪口雑言、覺悟をしろ……」と刀の鞘を拂つた。禪師はひらり體をかはして一目散に本堂へと逃げ込む。怒髪天をつき、心焦立たる信茂、おのれ逃がしはせずと跡を追懸けた、堂上堂下忽ち變る修羅場の有様、禪師フト背後を願て「あら恐ろしや、地獄の鬼が來た」と叫んだ。この一言にさしも熱せる信茂も、總身冷汗を流して平身低頭、禪師の足下にひれ伏して自己の粗忽を詫た。「あな有難や、それ極樂の菩薩が來た」と破顔微笑。

信茂初めて省悟するところあり、以來禪師に參じて生死の大事を透過し、一機一境、一出一入、斯道の端的に堂入して一生受用不盡なりしと。古人歌うて曰く

傀儡師首にかけたる人形箱

ほとけ出さうと鬼を出さうと

穆山禪師の眞面目

禪門近代の耆宿として明治年間に祖風を宣揚されたる西有穆山和尚、提唱は白雲深き處金龍躍るが如く、眼藏家として恰も高祖の再來と敬稱され、學人に對しては頗る辛辣を極めた。されば今日和尚の會下より出て、眼藏家を以て稱され居る人は秋野孝道、丘宗潭の二師位のものである。併し他の一面には鬼眼睛を弄して洒脫縱横の妙手があつた、閃電光中殺活を辨ずる能はざるは蓋し和尚の眞面目であらう。

或年の事、地方巡化の矢先、何處へ參つても老禪師と崇められるので内心頗る不平であつたらしい。偶々豫て禪師を知れる一僧が拜謁に出られると、挨拶の言葉了るや否や、

「金天狗はないか、納は爺臭い事は嫌ひぢや、ドーセ年が寄つて居るんだから老人の真似をせぬでも分つて居る。金天狗はないか」

と、當時流行の巻煙草を請求して、並み居る寺院を煙に捲いたと云ふ様な珍談は多くある。和尚の達磨と遊君との對座の圖に贊をした其文句は有名なものであるが、狂歌も頗る得意とした。或時某氏より豆を送られて

豆て居る吾れに豆かと豆贈る

君も豆とは吾れ知られけり

八十一歳にして宗内の希望黙し難く、大本山總持寺の主席を董す。時に一首あり、

八十一つ百にも足らぬ小使て

能登へ行くとは氣の強い旅

鶴見に移轉した總持寺は當時能登の國にあつた。

再建と聞けど寄附さへ出来ぬ故

たつた一つの命奉納

老朽らし木を焼跡の柱とは

思ひもよらぬ用材となる

在山五ヶ年、辭して横濱西有寺に退隱せられ、明治四十三年十二月四日九十歳を一期として眠るが如く遷化せられた。和尚が九十年の應機接物は恰も深々たる海底を望むが如く、今人の凡眼を以て見れども見る事能はざるものがある。

身心の鍛鍊より見たる伊藤公

望臺山下二龍山。歴々戰國眉睫間。殘壁猶存攻守跡。碧血染レ土土班々。

公齡七十に垂として老氣尚秋に横はる、茫々たる大陸の風雲に豪懷を遣りつゝ、大命を奉じて三國境上に赴く途上、遙かに二龍山の苦戦の跡を望んで賦したのは右の一絶である。

身心の鍛鍊より見たる伊藤公

あ、一句何の意ぞ、明治四十二年十月二十六日の午後、哈爾濱に於て出迎へられた一聯隊の露軍を閲し了つて、將に歩を廻さうとする一刹那、群集の背後から銃聲が起つた。

と見る間に、公の身邊は濛々たる白煙に包まれた「やられた」と一聲、鮮血迸る胸を抑へて、倒れんとする身を辛うじて隨行員の手に支へられた。川上總領事其他二三の人々も傷ついたのである。
上を下への大動擾。

「三發やられた、何者だ」と、公爵は氣も確かに、斯う靜かに問うたが、もう顔の色も變つて居た。車中に扶け入れて應急の手當を施しブランデーを一匙すゝめると、稍息を吹き復した。

「兇漢は朝鮮人ださうて御座います」
「ふむ馬鹿な奴だ」

それが最後の言葉であつた。二度目のブランデーは最う効目がなかつたのである。晩年に於ける公は韓國統監の印綬を解きしと雖も、蒼浪閣上偃臥の夢未だ圓かなる暇なく、常に身を國に處するの傍、密に禪に參じて心要を練磨して居た、其得道の師は森田悟由禪師であつたのである。

今上陛下まだ東宮に在しませしける頃、北越巡幸の砌り、自ら案内役となつて越前の山村永平寺に詣て、祖堂を拜し、禪師と卓を圍んで暫し靜寂なる禪境に世事を忘じたのも、公が求道の一端とも見る事が出来やう。併し公の信仰は偶發的のものではない、現に彼の祖父の如きは殆んど後半生を佛事三昧に了つた人である。その感化は蓋し偉大なものであつたらう。

周防國徳山在東荷村は、山中の僻村である、この僻村に明治の大偉人博文伊藤公は瓜々の聲を擧げた。

東荷三千石、庄屋の息子

身心の鍛鍊より見たる伊藤公

藁て髪結うて能孕かきに

と歌ひたる程の質素の村である。この村にて口利と稱せられた助左衛門は公の祖父であつて、後に四國八十八ヶ所を巡禮して歸郷後、村内に一菴を營み、柳觀居士と稱して餘生を念佛三昧に送つた、この子息に十藏と云へるは即ち公の嚴父である。

然るに弘化三年、公六歳の折、十藏氏は鶴然として感ずる所あり、單身郷を出て、萩に赴いた。公は幼名を利助と云うて母なる人と共に六歳より九歳まで外家に居り、一個の腕白小僧であると云ふの外は、別段他日立派な人物になりさうな特色とても見えなかつたのである。たゞ身體はこの時より丈夫であつて相撲も強く、木登りも得意であつた。秋の空に木の實の赤くなりし時は、柿の木の上などに公の幼き影を見た村人も多くあつた様子、公は時としては天満宮の森に目を捕へ、時には玉川筋に釣を垂れて腕白小僧同志互に獲物の多少を較べて自慢の鼻を高くした事もある。夏になれば終日河中に游泳して家に歸るを忘れ、又或時は年長者と口論して囁付かれたことも

ある。人影稀なる十五町の山路を辿り、油壺下げて油買ひに行つたこともあり。かゝる風塵中に埋没しては伏龍鳳雛も凡人と何の差違なかりし様子、されども蛇は寸にして牛を呑むの氣質は、自ら現れ、負嫌ひは此時より公の特點として人に知られ、己は武士なりなど、力味ては竹切を拾ひて刀なり杯云ひて、腰に差して歩いて居た。或時村の庄屋林左衛門と云ふもの天満宮に參詣した、其時に小兒等は兼て神殿の床下に仕舞ひ置きし祭禮用の出車を引張り出して遊んで居たのを見て、不意に其場に現れ出て、大喝一聲怒鳴つた。外の小兒は蜘蛛の子を散らす如く、逃げ失せたけれども公のみは平氣にて其場に止まり、

『出車を出すのは私も悪しき事と存じ、色々止めるやうに申したれと思ふに任せず、心ならずも皆のものと一所に遊び居れり』

と悪びれもせず道理を盡して言ひ譯した、林左衛門其時内心大に公の膽力に驚き、あの子は善く育てねば大變なものになるぞと云うた。紫の園にあつても顯はるゝとは

斯ることを謂ふのであらう。

公が九歳の折、父十藏翁より萩に迎へられ、爾來十二歳迄の公の生涯は随分難儀を極めたのである。當時公は或家に若黨奉公を爲して居たが、主人の供をして他家に赴き、用談中天氣俄かに一變して主人は履物を借りて歸宅し、翌日それを先方へ返し、自分の預け置いた履物を取り來れよとの主人の言附、折節嚴寒にしてしかも雪の降りしきる最中、主命に依りその履物を懷にして歸る途中、雪はいよ／＼降り積り、寒氣は益々はげしくなつて來たので、しばし我家へ立寄り手足を暖めんと母なる人を訪ふたのである。時に母は公を見るより

「他家へ使を勤めながら寒いと云つて、家門に入るは甚だ不心得極まる」と叱り付けて、一杯の湯さへ與へず、其儘公を追返したと云ふ。

一事は萬事である、若黨利助時代の公が年少苦心の有様は略推察することを得るのだ。かゝる苦心中修養の道程を辿られ、十三歳より萩にて久保五郎左衛門の家塾に學

び、來原良藏に知られ、其縁にて吉田虎次郎の門に入り、國士の修養を爲し初めて政治界に乗り出すやうになつたのである。

居士の胸中を看破せる默雷禪師

山を隔て、烟を見て、早く是れ火なることを知り、牆を隔て、角を見て便ち是れ牛なることを知る、とは碧巖錄第一則に示された、衲僧家尋常の茶飯事であるが、單に眼光紙背に透る位では與奪自在の本分底とは申されない。とは云へ學人の脚跟を一寸睨んで、肚裡幾許の葛藤あるやを看破するの宗師家は、現代には極めて少ないのである。

京都東山の左邊窟、竹田默雷和尚は洒落縱横の活作略、衆流を截斷するの妙手は、よく學人の心膽を寒からしむることが數々ある。或年の臘月大接心に、一人の居士が頻りに參禪して種々と見解を呈露して見たが、和尚は容易に許さないのみか、應機頗

居士の胸中を看破せる默雷禪師

る峻峻惡辣些とも寄せ附けない。居士はいよ／＼業を煮やし、疍癩玉を破裂させて、今夜最後の獨參には是非に拘はらず、和尚に鐵拳を見舞ひ呉れんものと、心中窃に覺悟を定め、應て時到着るや、型の如く室外で作禮低頭して入室し、今や和尚の前に跪坐せんとした刹那、和尚は不意に「アイタ／＼」と叫んで、仰向に座蒲團上に倒れたので、居士は吃驚仰天、和尚は如何にして我がこの心中を看破したものと、殆ど喪身失命せんばかり、深く前非を悔いて眞面目な居士になつたと云ふ事である。

一休禪師の女人濟度

禪僧の奇行逸事に於ては先づ横綱の資格ある一休禪師、母は藤原氏、後小松天皇を父君として九重の雲深く、羅綾の幕に呱呱の聲を揚げられしは人の知るところである。資性放膽細事に拘泥せず、大法宣揚の赤誠を飄逸洒脱の衣に包み、東涌西没、逆順縦横の活作略、初めて宗純と命名せられた稚兒時代より、八十八歳の大往生に至る迄、

本來空の色身をば三界苦樂の眞只中へ洒け出し、與奪自在の活說法數ある中にも、茲ては只婦人に關する一面のみを窺はんとするのである。

一日某婦人の爲に禪要を示されたるものは、禪師の尺牘中尤も眞面目なるもの、一である。

「まづ御心もちと申すは、朝夕佛法に御油斷なき事にて候。古へ今に至り、浮世のあり様、御夢の如くにさへ思召され候へば、なに事も御ころのとまる事御座候まじく候。爰を佛御觀念ありて、法華の文に「觀彼久遠、猶如今日」と御述べ候此の文の心は、かの久しく遠き事を見給ふに、同じくけふの如く見給へとの御事にて候。天地ひらけはじまりしより以來かはる事なしと、よろづの事をさとり給ふとの御事にて候。然らばさのみふかく御不審あるまじく候。佛法と申すは執着をいましめ給ふ、さらに心をとどめても、その甲斐なき事にわざと見まゐらせ候と、まづ禪家にもちる申し候。

と誠め、更に何物にも執着すべからざる要を説きて、

夫れ人間のあり様は萬事とまゐること無し、もとより生れのはじめを知らざれば、死の終をわきまへず、やみく／＼ばう／＼として苦の海に沈む也。こゝを佛のあはれと思召て、色々の御方便にて衆生をすくひ給ふ。されども人間のこゝろふどうにして、惡道へあゆみをすゝめ、よきかたへは心すゝみがたく、いたづらに光陰を送り、六道あはれみの業果たえず、たま／＼教にしたがふといへども、名利の善をなす事ばかり也。

實に懇々と盡さざる甘露の法味ではないか。世には飄逸洒落の禪師が一面のみを見て、この血涙滴々たる眞面目を見ざる者が多い。當時の佛法は王侯貴人の佛法であつた、名聞利養の佛法であつた、佛を信する者も、法を説く者も、共に生死の繫縛を脱する事能はず、六道輪廻の其中に浮沈極まりなき生活をして居る者のみであつた。禪師の大法宣布には血もあり涙もある。特に賢明にして、不遇なりし母の感化を受けし禪師

の婦人に對する觀念は一層痛切なるものであつた。前述の示教は其一例に過ぎぬ。されども執着心を誠められたる禪師の行履は爲人度生、應病與藥の見地に住して、向上向下自由無礙の活手段は隨所に現成するのであつた。

彼の住吉の草庵に在つて光風清月を友として居た頃、一夕うき世を包む頰冠りに、歌舞の菩薩の降臨を拜まむものと、幾多のうかれ男の中に交り、泉州堺の北の庄、花咲き匂ふ色の街に足を入れて、當時全盛比びなき地獄太夫の道中になつたり出逢うた。醉眼朦朧の中に太夫を眺むれば、恰も錦繪を抜け出したかの如き美しさ、美しさ中にも犯し難き氣品自ら備はりて、黄金に動かぬ女郎花のスラリとした立姿「おゝ聴きしに勝る美しさ」と、一休は麻の衣を拵がせば、太夫は莞爾微笑みふりかへる、その優しき眼光に早くも尋常一様の沙門に非ざるを看破した。

山居せば深山の奥に住めよかし

こゝは浮世の堺ちかきに

と詠みければ、一休は化導の縁と喜び、

一休が身をば身ほどに思はねば

市も山家も同じすみかよ

と返歌した。太夫は將に錦繡の襦袢を春風に弄らせつゝ、一休の醉顔を恍惚と眺めつ
つ歩を運ばんとする風情の面憎さに

聞きしより見て美しき地獄かな

と詠みかけると、流石は太夫、間髪を容れず

生きくる人も落ちざらめやは

と下句を付けた。因縁早くも成熟して、茲は朱樓金襖の太夫が居室、山海の珍味を前
にして飲めや唄への大騒ぎ、打鳴らす太鼓に搦む三味の音も、廻る盃と共に春夜の
燭臺の光は次第々々に薄れゆく。後はそのまゝ、白河夜船、覺めて果敢なき一夜の夢も、
地獄太夫に取りては末世の優曇華、心地の光明は一休禪師によつて初めて認めさせら

れた。

迷ふが故に三界は城、悟るが故に十方空、あらゆる妄想執着の絆を絶つて、遊戯三
昧裡に入り、十九歳を一期として花の顔せを焼野に曝した。

われ死なば焼くな埋むな野に棄て、

瘦せたる犬の腹をこやせよ

朝に別れを惜みし源家の客も、夕に黄金を積みし平氏の客人も、太夫の頰れゆく
屍、哀れなる白骨を眺めては、我れ知らず菩提の道に入り、遂には一休禪師の門を訪
うた者も幾人かあつた。

朦々然而四十年。淡々然而四十年。朦々淡々八十年。末後脱、屎捧、梵天。

喝

柳不_レ緑。花不_レ紅。

これが禪師の最末の一偈である、禪師の真面目である、執着を離れて道に入るの外何

物もない脱體露現である。

本来もなきいにしへの我なれば

死にゆくかたも何もかもなし

生死不二の端的、禪師の名を口にするものは是非其真面目に接するの覺悟がなくてはなるまい。

峻嚴なりし淺野斧山和尚

曹洞宗内の名師には提撕の妙を以て名ある人も随分多いが、故大學教授淺野斧山和尚の如きも蓋し一流の人であつたらうと思ふ。其學殖は深々たる海底を望むが如く、眼は流星に似て、超世絶倫の氣風があつた。其氣鋒の鋭い事は、時に氷凌上に向つて往き、時に劍刃上を走る、淵達の舌端は其容貌に似て甚だ瀟洒たるものであつた。和尚は有名なる白鳥鼎三の嗣、其修行時代は甚しき神經質のため、一般からは別

取扱を受けて居た、随つてこの外界の壓迫と内心の不滿とは、一時に嵩じて身も世もあらぬ思ひをした、この苦痛を脱るゝには如何にせばやと千思萬考。非常な場合には非常な手段を取らねばならぬ、苟も禪門に籍を掛けたる以上、他に道を講ずるに及ばぬと決心して、深夜床を蹴つて庭前に下りた。

霜は満底に白く、月は中天に輝いて居る。寒風凜烈の間を結跏三昧の境に遊んでは、人知れず單に歸る事幾夜を續けた。斯くして快感を自得する迄には尋常一様の修行てはなかつた、其間不幸にして烈しき病に犯されたが全快の時には、往時の苦痛痕跡を止めず、眞に禪の妙味を獲得した、とは師の直話である、所謂大死一番し來つて再活現成せるものか。

「眞の禪宗なるものは行ふに盛んにして説くに衰ふるものである、説禪の徒天下に満たば禪門地を拂ふの時であるを思はねばならぬ。」

と、垂誡するのを常とした、が師は亦説禪の巧者であつた。大學教授を辭して靜岡縣

の最勝院を董するや、禪門三宗合同の大攝心會を行はんことを企劃して未だ成らず、終に化を他界にされたのは惜しみても餘りあることである。

卍庵毒藥を投ぜられて大悟す

或時は一莖草を拈じて丈六の金身となし、或時は一微塵中に梵刹を建立するは禪家の尋常の活作略、されど言詮は易く實行は難い。籌を帷幄の中に運し、勝を千里の外に決するは戰場に臨む者の誰しも念頭を去らない事ではあるが、イザ火蓋を切つた一刹那になると兎角口程に丹田が承知しない。一度生死岸頭に立つて自由無疑の機用を現出しない以上は他に對して大言壯語は用不着。

今茲に述べんとする禪林の碩徳卍庵和尚の如きは眞に言行一致の活衲僧と稱すべきである。和尚は十七歳の時初發心の修道に就いた。越後國長泉寺の天綱和尚の會下に在つて鉗錘を受けたのである。然るに二十八歳の冬、人と爭論して互に相譲らず、旗

を攪き鼓を奪つて堂々論陣を進め、終に對者を屈伏せしめた。素より法の上の争ひに一點の私情を挿ひべき意味のものではない、が矢張凡情の支配を免れ兼ねたる對者の僧侶は、遺恨骨髓に徹して深夜に至るも眠り成さず、淺間しくも何處よりか持來りし毒藥を懷にして卍庵和尚の油斷を狙つて居た。

斯る事とは夢にも知らぬ和尚は、叢林の平素三時の勤行に餘念なく辨道修行をして居つた。然るに不思議なるかな、數日にして全身忽ち紫黑色となり、非常なる苦痛、恰も無間地獄の呵責も斯くやと思はるゝばかりであつた。時に和尚は忽然として私に思へらく

我叢林に入つて參禪辨道し、水に立ち雪に坐して脇を席に着けず、夙夜に忘却せざることを十餘年、生死を透脱し、自己を脱落せりと思へり、今此毒に苦しめらるゝとも、轉處自由ならざることかは、

我毒に轉ぜらるゝか、將た毒を轉ずるか、禪の作略は當所々々に活現すべきなれど、

「卍庵毒藥を投ぜられて大悟す

斯る大事に處してこそ、眞の機用を發揮せねばならぬ。和尚は忽然として大勇猛心を起した。直ちに端坐瞑想、正念調息して四大分離觀に入り、性相俱に忘じて微かに正念相續することを得た。時、偶々曉鐘の響を聞き、翻然として前來の苦痛消散するの時、吐瀉忽ち來つて臟腑一時に洗盡し去り、身心爽快を覺えて窓外を望めば、東天既に紅であつた。

是に於て毒藥の妙味を會得し、憎愛の二見を離れ、怨親一如の端的を證する事を得ると共に、死中に活を得、活中に死を得、死活不二、苦樂一枚の根源を獲得するに至つたのである。

禪的性格の三博士

我國の佛敎界に於て學德兼備の名師として、幾多の信者から佛様の如く崇拜せられつゝある方は多くあるであらうが、予は茲に博士の稱號ある三師に就て、其禪的性格

の共通點を見出したのである。三師と云ふは南條、村上の兩師と、更に前田慧雲師とを以て佛敎界の三博士と稱するのだ。

尤も佛敎界には他にも博士はある、井上圓了氏の如き、加藤玄智師の如き、推尾辨匡師の如き其學識に於て、徳望に於て、同じく敎界の重鎮であることは言ふ迄もない。予は二師の譬喩に接し、其門を敲いた事は兩三度ないではないが實際に於て、あまり委しき日常の事は知らぬのである。

事實に於ては、村上博士が曹洞宗大學の講師として其請聘に應じ初めて上京せられた時は「文學士の肩書ある井上先生の資格に對し吾輩も亦恐縮して、言ひ度い事もよ

う言はず、倉皇遑を告げて出た」というて居るが、これは過ぎし昔の夢物語、今日では聲望ある老博士として敎界のために盡されて居る。

のである。

先づ第一に三博士共に真宗大谷派の寺に生れて居るに拘はらず、今日は東京に居住して、寺即ち伽藍佛敎を離れ、居士的生活の下に活動して居らるゝことである。殊に予等後進者の模範とするに足るのは、三博士共に簡易質素を旨として其生活は禪房のその如く、其日常に於ては綿服を纏ひ肅然として人に對坐し、未だ嘗て輕佻浮薄の言を弄せず、而も一點の隔意なく誠心を以て、他の爲に盡さるゝことである。

禪語に「門に入らば先づ額を見よ」と云ふことがあるが、其玄關先に立てば、大抵其家庭のある部分は認め得らるゝものだ、今三博士の玄關先に立つて來意を告げし咄嗟の觀念を綜合して見ると、是又同一の感がある。下手に東京ずれのしたニキビ書生が「何しに來た」と云はん計りの顔付で取次に出られた時の心持と、笑を含んで鄭重に來意を問はれた時の心地とは、自ら主人の召使に對する平素の感化を思はざるを得ぬのである。

嘗て前田博士の處に、田舎からポット出の女中が居て、兎角言語が粗暴であるが爲め、博士の夫人は折を見て言語の使用法を教へると、博士は「ナニ構はぬ其儘にして置きなさい、言葉が東京風になると、氣質が自ら東京化する、田舎出のまゝで結構ぢや」と云はれた事を聞いたが、脂粉を施さざる禪風を尊ぶ博士にして初めて言ひ得る事である。村上博士の家庭にも田舎辯の女中さんが居つて取次に出られる、南條博士の宅にも、温厚玉の如き博士の感化だナと思はるゝ人が取次に出られる。

かゝる事は元より微々たる事に似て、而も他の紳士學者の家庭に容易に見ることの出來ぬ偉大なる徳化と云はねばならぬ、これ學徳兼備の三博士の家庭に於て殊更に此の感を深くした。

次に演説振であるが、一口に云ふと三博士共何等奇抜な事もなければ、又滑稽諧謔を以て聽者を喜ばせると云ふやうな事も無い、悪く云へば極めて平凡であつて、其説も亦新しいものではない、併しこれが三博士の俗界に超然たる特長であらうと思ふ。

十數年以前の事であるが、予は南條師を渴仰のあまり數里を遠しとせず、師の講演のあるところ數ヶ所を追かけて歩いた。其時は何處も「三寶の話」と云ふのであつて、當時は實に落膽したのであるが、而し今日考ると是れが亦妙に頭の中に染み込んで、殆んど其秩序、其聲音、其態度、悉く整然として深きく印象が残つて居る、これ全く人格の力である。

若し夫れ村上博士の飽迄も自己の確信を傳へる熱心と沈痛なる口調とは、たとへ幾十年間演壇に立たれた人であつても容易に與へ得ざるインスピレーションを持つて居る而も是を是とし、非を非とする明晰なる截断は世に阿る偽學者輩の到底窺ひ得ざる衆流截断底の權威である。

前田博士の演説は恰も慈父の子弟に對する如く諄々として説き、飽迄も徹底せしむるところに眞面目なる博士の人格がある、温情玉の如き宗教家の態度がある。而も三博士共に幼少時代より早くも憂き世の苦痛と闘はれ、逆境中に幾多の修養を

重ねた一事に至つては所謂お坊ちやん的のトン／＼拍子に梯子登りをした學者達とは徹頭徹尾其趣を異にして居るのだ。

いづれ後日を期して、後進の模範たるべき三博士の苦學實驗談を紹介することもあらう。

信長の師傳平手政秀

憂い目、辛い思ひは誰しも避けたいのが人情、況してや、いやが上にも長かれと祈る生命を短縮して迄も、主君の爲に奉仕すると云ふ事は、元是れ臣たるもの、本分と、理では分つても、偕て行ひの一般に至つては古往今來曉天の星にも似たる程の有様である。

彼の織田信長は實に戰國時代の英雄として、他の諸將に比するも些かの遜色はない然り信長は英雄である。英雄ではあるが、其辿るべき行程には幾多の凹凸波瀾矛盾撞

着の石ころが轉がつて、一步は一步より峻所難所と、或は躓き、或は倒る、其度毎手を拍つて笑ひさゞめく者は獨り敵の間者ばかりではなかつた。暗雲四方を閉ぢ籠めて一步も油斷がならぬ際である。かゝる暗路には脚下を照す一點の光明がなくては、如何なる英傑と雖も、遺憾なく伎倆を發揮することは出来ぬ。實にこの一點の光明であるのだ。

「一將功成りて萬骨枯る」と云ふがそんな悲惨の壓迫より生ずる光明ではない、怒鳴らるゝが恐ろしさに、道しるべする馬子の提灯ではない。自ら進んで、喜んで、自身を棄てゝ與ふる至誠の光明である。十歳の少女が富士の絶頂に登つたと新聞は傳へた。これを聞いた人は只登つた人のみを見て、之を登らしめた即ち案内者、換言すれば目的物に對する光明を見ない。英雄としての信長にも、此一點の光明が始終燦然として脚下を照して居た。

傳の平手中務大輔政秀は即ちそれである。予は先年名古屋に開かれたる全國感化救

濟事業大會に參じ、其際親しく政秀の墓を拂ひ、一片の香花を手向け、そゝる當年の彼が心事を憶ひ遣つたのである。

墓は名古屋市中區矢場町に臨濟宗の妙心寺派に屬する政秀寺と云ふ禪寺の境内に在る一片の碑石、表には

『政秀寺殿功庵宗忠大居士、平手中務大輔政秀』

とあつて裏に、

『天文二十二年閏正月十三日於志賀村自切腹』

と記されてあつた。

信長の幼年時代は、實に腕白小僧であつた。然るに稍長するに隨ひ、豪放無狀、大童に振り亂せる頭髮を藁にて束り、常に侍臣の肩に手を懸け、太刀を繩にて腰にぶら下げ、瓜や西瓜をバク付き乍ら、傍若無人の態度で大道を往來する有様は誠に父君が痛心の的であつた。されば老病再び起つ能はざるを知るや、信長の師傅平手政秀を呼

び、涙と共に彼が後事を托し、間もなく黄泉の客となつたのである。

政秀は日常、禪に參じて自己を究明しつゝある、有道の居士である。一旦父君の仰せを承はりし上はと、有總術策を施しても、主君信長の亂暴狼藉は依然として改めない。諫言苦語、手を換へ品を易へて、天晴の武將たらしめんと心掛たが、いつも馬耳東風。於茲、政秀深く心に決する所があつた。

天文二十二年正月十三日、天未だ明けざるに幽なる燈火は寂寥たる一室内、白装束麻袴、腹眞一文字に掻き切つて正に息の根を止めた政秀の冷たき死骸を照して居る縷々として立上る香煙の傍には奉書包の一封、主君信長に宛たる諫言狀の外は何物もなかつた。

あゝ彼は托されたる一子の、迎るべき行路の光明を與ふべく、遂に身命を捧げたのである。

流石の信長もこの有様に驚愕尋常ならず、一室に籠居する一七日、退いて自己の罪

過を責め、進んでは忠節なる政秀の心中を察し、憮然として冥想の人となつた。遂に政秀の爲に一寺を建立して其靈魂を慰め、自ら誓ふて曰く、

「吾徒らに悔るも何の益かあらん、正に過を改め行を勵み、他日天下に大功を樹てん。政秀瞑せよ」

と其忌日には必ず參拜して武事を勵み遂に天下を統一するに至つた。

寺は則ち政秀寺、目下の住職は加藤宗俊師と云つて十七代目に方つて居る。

道に親しき祖岳和尚

たゞ一口に臨濟棒喝下に向上の一路を辿られた宗師家である、とのみ聞いては、如何にも峻烈なる禪機、劍刃上を走るが如き氣風を想ひ出ださるゝのであるが、一度師の警咳に接した人は必ずや意外の感に打たるゝてあらう。師は常に微笑を帯びて、一點の圭角なく、如何なる人に對しても、恰も十年の知己の如くニコヤカに打解けて物語